

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya
Goken News
No. 19 July 2008



オクスフォード、夏の夕暮れ：
19世紀の詩人マシュー・アーノルドは夕焼けを背景に建ち並ぶ
コレッジの塔を「夢見る尖塔」(dreaming spires) と呼んだ。

— CONTENTS —

- ・ サンフランシスコ周遊記
— ヒッピーと音楽の街 —
(古川 邦之) 2
- ・ 蝙蝠を食べる勇気はありますか？
(矢田 博士) 4
- ・ 辞書を使いこなせ！
(服部 茂) 7
- ・ ロンドンで世界一のミュージカル
『レ・ミゼラブル』を楽しむ
(太田 幸治) 9
- ・ D.H.ロレンスのキリスト教批判と
異教への傾倒
(山田 晶子) 15
- ・ 中国のスノーピー
(藤森 猛) 16
- ・ 蝶と蛾
(安藤 聡) 18

- 海外最新事情 22
 - ・ イギリス
 - ・ 韓国
- 外国語コンテスト 25
 - ・ 英語部門
 - ・ ドイツ語部門
 - ・ フランス語部門
 - ・ 中国語部門 (法・経営)
 - ・ 中国語部門 (現中)
 - ・ 韓国・朝鮮語部門
 - ・ 日本語部門
- 外国語コンテスト入賞作 29
 - ・ 英語部門
 - ・ 中国語部門
 - ・ 韓国・朝鮮語部門
 - ・ 日本語部門

サンフランシスコ周遊記 —ヒッピーと音楽の街—

経営学部
古川 邦之

2007年12月、僕はAGU (American Geophysical Union) の Fall Meeting という学会に出席するためアメリカ合衆国西海岸に位置するサンフランシスコを訪れました。この学会は、地球及び宇宙に関する全分野の研究者が集まり、今回の学会参加者だけでも15,000人を越えるほどのマンモス学会です。会場で顔見知りの研究者に遭遇するだけでも奇跡に近いと言えるでしょう。僕は研究成果をポスターで紹介しました。写真1はその会場ですが、これでもほんの一部で全体はこれの10倍以上の広さです。何回も迷子になりました。

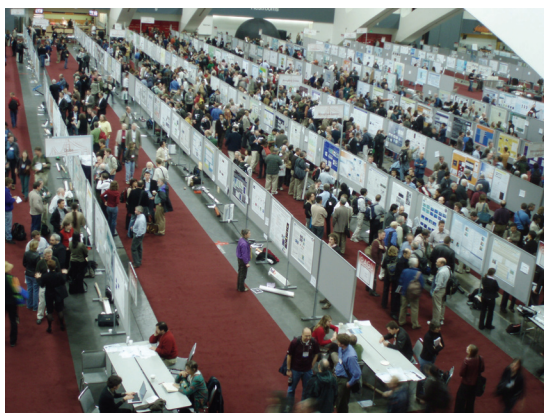


写真1 ポスター発表会場の一部

サンフランシスコは大阪市と姉妹都市で、空港内は竹が飾られており和風です。また急勾配の坂がとても多い街で、徒歩ではきついので昔からケーブルカー (写真2) が発達しています。テレビや雑誌などでも見かけるケーブルカーのステップ乗



写真2 ケーブルカー

車は観光客の憧れですが、真横を車が猛スピードで走り抜けるのでヒヤヒヤします。僕は調子にのってステップで写真を撮っていたら、危ないからやめろ！と運転手さんに叱られました。またサンフランシスコは、アメリカ合衆国におけるヒッピームーブメントの中心地としても有名です。ヒッピーとは、1960年代後半に生まれ、伝統や制度などの価値観を否定し自然回帰を目指す人々の総称です。1969年の映画イージーライダーやウッドストックと呼ばれる音楽祭は、その文化の代表と言えるでしょう。このような文化は、サンフランシスコの中でも、特にヘイトアシュベリーという地区が中心でした。ヘイトアシュベリーは現在でも多くのヒッピーが住んでおり一風変わった地区です。多くの壁には特徴的な絵 (写真3) が描いてありますが、これもヒッピー文化の象徴です。また街中で見かけたヒッピーは、布を体に巻き付けていた



写真3 ヒッピーの芸術作品

り、ぼろぼろのぬいぐるみを持っていたりと自由な雰囲気が漂っていました（写真4）。またヒッピーの連れていた犬には眉毛が描かれており、犬も自由そうでした。僕の心の師匠たちが集う場所でしたね。



写真4 現役のヒッピー

サンフランシスコは音楽の街としても有名です。ヘイトアシュベリーの近くには、僕の尊敬するロックシンガーのジャニス・ジョブリンが住んでいた家もあり、そこで若くして亡くなった彼女に思いを馳せました（現在は他人の家なのでゆっくりできませんでしたが...）。また泊まったホテルは、トムソーヤの冒険の作者であるマークトゥウェインとジャズシンガーのピリーホリデイが出会った場所で、それを記念する絵画が飾られていました。僕はピリーホリデイが大好きで、やはりその絵画の前で何回もシャッターを切りました（写真5）。

夜ご飯を食べようと街を歩いていると、その種



写真5 マークトゥウェインとピリーホリデイ



写真6 七輪にのる餃子

類は多様で、おそらくどの国の料理でも食べることができます。ちなみに SUSHI BOAT という日本料理店のショーケースには、七輪の上に餃子がのったサンプルが置いてありました（写真6）。七輪で焼くと言ったらやっぱり餃子は外せませんよね。ここでも自由を感じることができましたね。まあ様々な料理があるわけですが、やはりアメリカなので、基本的にはステーキをメインとする料理が多いようでした。でかすぎでしたが（写真7）。また一度だけライブを楽しみながら食事を行いました。しかし実は、僕は食事目的ではなく、ライブを心から楽しみにしていました。そのライブは、僕の尊敬するブルースシンガーであるジョンリーフッカーの娘、ザキヤフッカーのステージだったからです。そして何とライブの合間には、ザキヤは客席に出てきてくれました。僕は、あなたの父親の大ファンで今夜からあなたの大ファン



写真7 巨大なTボーンステーキ

になった（少しお世辞も加えます）、ということ
を伝えと、とても喜んでくれて、父親であるジョ
ンのCDブックレットにサインをしてくれました。
さらにジョンの名曲“ Boom Boom ”をいっしょ
に唄ってくれた時には、爆発してしまいそうなく
らい嬉しかったです。最後には、テーブルまで来
て唄ってくれ、いっしょに写真を撮ってくれまし
た（写真8）。



写真8 ザキヤフッカーと

このようにサンフランシスコは、僕の尊敬する
人たちがいた場所であり、僕にとっては特別な場
所と言えます。特にヘイトアシュベリー地区は心
落ち着きます。この街は治安的にも悪くなく（も
ちろん悪い地区もある）、十分に気を付けてさえ
いれば怖い目に遭うことはほとんどないと思いま
す。皆さんも自由を感じたくなった時には、ぜひ
サンフランシスコへ行ってください。

蝙蝠を食べる勇氣はありま すか？

経営学部

矢田 博士

一、はじめに

前号に引き続き蝙蝠の話をしてみたい。前号で
は、蝙蝠を主題とした中国古典詩歌においては、
蝙蝠はおおむね嫌悪の対象として詠われていたこ
と、その一方で、今日の中国においては、蝙蝠の
「蝠」が「福」と同じ音であることから、めでた
い生き物とされていること、そして蝙蝠をめでた
いものとする発想は、目下のところ明代の頃まで
さかのぼって確認することができ、陶器などの模
様にもしばしば吉祥文として画かれること⁽¹⁾など
について紹介した。

中国古典詩歌においては、おおむね嫌悪の対象
とされていた蝙蝠ではあるが、前号でも紹介した
白居易の「洞中蝙蝠」詩の冒頭の句にも、「千年
鼠化白蝙蝠《千年を生きた鼠が白い蝙蝠に変化す
る》」と詠われているように、蝙蝠には「長寿の
生き物」という側面もあった。今号では、その
「長寿」という側面に焦点をあてて論じてみたい。

二、蝙蝠を食べると長寿が得られるのか

先の白居易の詩にも詠われているように、中国
では古来、蝙蝠は長寿の生き物とされていたよう
である。例えば、『太平御覧』巻九一「獸部二
三・鼠」に引く鄭氏の『玄中記』には、

百歳之鼠、化爲蝙蝠。

《百歳の鼠が、変化して蝙蝠となる。》

とあり、梁・任昉の『述異記』巻下に引く『仙經』には、以下のようにある。

蝙蝠、一名仙鼠。千歳之後、體白如銀、棲即倒懸。

《蝙蝠は、またの名を仙鼠ともいう。千年の後、身体が銀のように白くなり、ねぐらにつけばすぐさま逆さまにぶら下がる。》

白居易の詩の「千年鼠化白蝙蝠 [千年の鼠は白き蝙蝠と化す]」という句は、以上の二つの言い伝えを組み合わせた表現と見てよい。

このように蝙蝠は長寿の生き物とされていたことから、さらにそれを食べると仙人のように不老長寿を得ることができるとも考えられたようである。西晋・崔豹の『古今註』に以下のように言う。

蝙蝠、一名仙鼠、一名飛鼠。五百歳則色白而腦重。集物則頭垂。故謂倒挂蝙蝠。食之成仙。

《蝙蝠は、またの名を仙鼠とも、飛鼠ともいう。五百歳になると色が白くなり脳が重くなる。物に止まると頭を下にしてぶらさがる。それゆえ倒挂蝙蝠という。これを食べると仙人になれる。》

また、東晋・葛洪の『抱朴子』内編卷十一「仙薬」にもまた、以下のように言う。

萬歳蟾蜍、頭上有角、額下有丹書八字體再重、……千歳蝙蝠、色白如雪、集則倒懸。腦重故也。此二物得而陰乾、未服之、令人壽四萬歳。

《一万歳ひきがえるの蟾蜍は、頭の上には角があり、あご額の下には八の字が二つ重なったような赤い模様があり、……千歳の蝙蝠は、色が雪のように白く、止まれば逆さまにぶら下がる。それは脳が重いからだ。これら二つの物を手に入れて日陰で干し、粉末にして服用すれば、人の寿命を四万歳にすることができる。》

蝙蝠を食べるとはたして本当に長寿が得られるのか、という点については、にわかに信じることはできないが、何らかの薬用効果はあったと言われれば、幾分かは信憑性も帯びてくるのではないだろうか。蝙蝠の薬用効果について、例えば唐・慎微の『重修政和證類本草』巻十九には、以下のように言う。

伏翼、味鹹平無毒。主目瞶痒痛療淋、利水道明目、夜視有精光。久服令人熹樂、媚好無憂。一名蝙蝠、生太山川谷及人家屋間。立夏後、採陰乾。

《伏翼は、薄い塩味で毒はない。目の見えにくさや痛みを伴うかゆみの改善および淋病の治療などによく用いられ、体液の流れや視力回復に効き目があり、夜でも物がはっきり見えるようになる。長期に服用すれば人を陽気にさせ、愉快にし憂いのない状態に導く。またの名を蝙蝠といい、深い山中の川や谷および家屋のすきまなどに生息する。立夏を過ぎた頃、つかまえて日陰で干す。》⁽²⁾

三、蝙蝠を食べてはみたけれど

さて、食べると長寿を得ることができると言われる蝙蝠を、実際に食べてみた人がいたようである。北宋・李石の『續博物志』巻六に、北宋の劉亮と唐の陳子真という人の例を挙げて、以下のよう

宋劉亮、合仙丹須白蟾蜍白蝙蝠。得而服之、立死。唐人陳子真、得蝙蝠大如鴉。食之、一夕大瀉而死。

《北宋の劉亮という人が仙薬を調合するにあたり、白い蟾蜍と白い蝙蝠を求めた。それらを手に入れ服用したところ、立ちどころに死んでしまった。唐の陳子真という人がカラスほどの大きさの蝙蝠を手に入れた。それを食べたところ、一夜のうちに大量に下痢をして死んでしまった。》

あるいは服用方法を間違えてしまったのであろうか、長寿を求めて蝙蝠を食べてはみたものの、何とも皮肉なことに、二人ともそれがもとで死んでしまったのである。

四、美食家の蘇東坡先生は蝙蝠を食べたのか

長寿を求めて蝙蝠を食べた人がいる一方で、ほかに食べるものがなく、貴重な蛋白源としてやむなく蝙蝠をたべざるをえなかった人もいたようである。北宋・蘇軾（字は子瞻、東坡居士と号す）の「聞子由瘦 [子由の瘦するを聞く]」詩の冒頭の四句に以下のように言う。

五日一見花猪肉	五日に一たび見る	花猪 の肉
十日一遇黄雞粥	十日に一たび遇う	黄雞 の粥
土人頓頓食諸芋	土人 頓頓として	諸芋 を食らい
薦以薰鼠燒蝙蝠	薦むるに薰鼠と燒蝙蝠と	を以てす

《ブタの肉には五日に一度、トリ肉入りのお粥には十日に一度、お目にかかれるだけである。土地の人々は毎食きまって蒸したイモを主食とし、おかずと言えば、鼠の薰製と蝙蝠の姿焼き。》

この詩には、蘇軾自らが施した注があり、以下のように言う。

儋耳至難得肉食。
《儋耳では、肉食を手に入れるのが至って困難である。》

「儋耳」とは、今の海南島（海南省）を指す。蘇軾は政争に巻き込まれ、最晩年の六十二歳の時にこの地に左遷され、六十六歳で死去する前の年まで、そこで過ごした。海南島は、一九八八年に経済特区に指定されて以降、開発が進み、今日で

こそ高層ビルが林立する大都市となっているが、蘇軾の当時は漢族の姿をほとんど目にする事のない、黎族が住む中国最果ての未開の地であった。

蘇軾のこの詩は、弟の蘇轍（字は子由）が痩せたという知らせを聞いて、蘇轍に宛てて贈ったもので、自らもまた、めったに肉食にありつけない海南島で、日々の食事に苦勞をしている有り様だ、と近況を伝えたものである。

蘇軾は、今ではその号にちなみ「東坡肉」の名で知られる「豚の角煮」の調理法を賦に詠い、また自らもそれを料理したと言われる。このように美食家としても知られる蘇東坡先生。はたして土地の人々が蛋白源として食べていた鼠の薰製と蝙蝠の姿焼きとを、彼もまた口にしたのであろうか。⁽³⁾

五、おわりに

長寿の生き物とされた蝙蝠。一説に、それを食べると長寿が得られると言う。しかし、実際にそれを試みた人が立ちどころに死んでしまったという報告も一方ではある。また、流罪となった蘇軾がその死の前年までいた海南島は、当時においては中国の最果ての地で、蛋白源となる肉がなかなか手に入らず、土地の人々は鼠の薰製と蝙蝠の姿焼きなどを食べていたと言う。

ところで、六十歳を過ぎ、当時の平均寿命をとうに超えていたであろう蘇軾先生。思い切って蝙蝠を食べて、寿命を延ばそうとは考えなかったのであろうか。それとも、このような惨めな状況のまま長生きをしても仕方がない、とでも思ったのであろうか。あるいは、そのようなことは非現実的な俗説・迷信として退け、もとより考えもしなかったのであろうか。蘇軾先生の当時の胸の裡は、今となってはあれこれ想像するほかないが、それはそれとして、読者のなかには自らの長寿を願っている人もいることであろう。さて、長寿を求めて蝙蝠を食べてみる勇気が、あなたにはおありだろうか。

【注】

(1) 筆者が大学および大学院でともに学んだ静岡大学情報学部の許山秀樹氏の御教示によれば、蝙蝠が陶器などでとりわけ紅色で画かれることが多いのは、「紅」の音が「洪（大きい、の意）」と同じであることによる、とのこと。つまり「紅蝙蝠」は「洪おおいなる福」を意味するわけである。

(2) 静岡大学教育学部生物学教室の伊藤富夫氏から、唐・段公路の『北戸録』に、紅蝙蝠が出てきて、ほれ薬のように書かれている、との御教示を得た。そこで確認したところ、巻一「紅蝙蝠」に、以下のようにあった。

紅蝙蝠、出隴州。皆深紅色、唯翼脈淺黒。多雙伏紅蕉花間。採者若獲其一、則一不去。南人収爲媚藥。

《紅蝙蝠は、隴州に産出する。色はみな深紅だが、ただ翼の脈だけは浅黒い。紅蕉花の間につがいで隠れていることが多い。捕獲の際に、もしその一方を捕まえると、もう一方は逃げようとしない。南方の人々は、それを捕獲して媚薬としている。》

(3) 冒頭の四句に続き、五・六句目で蘇軾はさらに以下のように言う。

舊聞蜜唧嘗嘔吐	も みつしつ かっ 舊と蜜唧を聞きて嘗
	て嘔吐し
稍近蝦蟇縁習俗	や が ま 稍や蝦蟇に近づくは
	習俗に縁ればなり

《以前に蜜唧みつしつという名の食べ物のことを聞いて嘔吐したことがあり、少しずつが ま蝦蟇に慣れてきたのは、この土地の習俗に従って暮らしているからである。》

「蜜唧みつしつ」は、鼠の胎児を蜜につけたもので、つまみ上げて口に入れ嚙むと「唧唧しつしつ」と音がすることから、その名がある。鼠の薫製といい、蝙蝠の姿焼きといい、鼠の胎児の蜜漬けといい、蝦蟇といい、この時期の蘇軾の身の回りの蛋白源といえば、いわゆる下手物げてものばかりであったようだ。

辞書を使いこなせ！

名古屋語学教育研究室
服部 茂

皆さんは、辞書を使いこなしていますか。私の机上には、十数冊の英和、英英、その他英語関係の辞書が積んであります。英語の授業準備の大半を語彙の語法、用法の再確認に費やします。英語教師にとって辞書は不可欠です。たとえば、私にとって辞書は、ビート板といえます。このビート板をつかみながら英語という広い海を泳いでいるようなものです。荒波がきてもこのビート板を操ってうまく波をかわしていきます。そして、授業での私の役割はこのビート板をもちながら、英文という海で泳いでいる学生の皆さんに、時折、このビート板や浮き輪を投げ込むことです。

皆さんの英語学習と辞書使用歴は、ほぼ同じぐらいだと思います。そして、辞書を使用するときは、主にテキストで分からない単語を中心に引いていることでしょう。英語の基礎をマスターしている人や辞書をうまく活用している人であればそれで十分です。もし、辞書を十分に使い切れていないと感じるようであれば、しばらくの間、辞書を中心に据えた英語学習をすすめます。つまり、辞書を英語学習の最大のパートナーにすることを目指し、辞書を使いこなせるようにすることです。

辞書といい付き合いをすることで、英語学習をより効率的にしかもおもしろいものにしてくれます。皆さんもご存じのように、最近の辞書には語意のみならずさまざまな用法の違いや語源、単語のイメージから文化まで言及されています。辞書の範疇を超え、充実しています。ただ引いて終わ

りではあまりにももったいない限りです。辞書を英語学習の中心に据えて行うことは、ある程度時間がかかります。必ずしもインスタントな学習ではありません。しかし、辞書が良き相棒になると、辞書があれば一人で英語学習がすすめられるようになります。これが、辞書を使いこなすことを目指す最大の利点です。

辞書を引く際、名詞、形容詞、副詞はその語意決定には比較的苦労しないと思います。むしろ、形容詞、副詞では文中で置かれる基本的な位置、また、その他の位置の場合はどんな解釈が可能か、そして、どの品詞を修飾するかを調べるのが大切です。名詞は、その語源には興味深いところがあります。多くの場合、述語動詞（以下動詞と記述）の意味を調べることになるだろうと思います。動詞には、さまざまな組み合わせで多様な意味になります。英単語は、同じ綴りで複数の品詞をとるものもあります。その際、品詞の決定はその単語が置かれている位置で決まります。動詞は、名詞（主語）の隣りにきます。さらに、動詞の場合、自動詞、他動詞に分かれます。その動詞の後に来る語順（文型）で動詞の意味が決定されます。動詞は、数ある語意からの確にその英文にふさわしい意味を選ぶことがポイントになります。単語は、単独で意味は成しません。文の中に入って、もっといえばその文が使われている状況に即して意味を成します。普段、授業で予習の成果を求めて学生さんを指名する際、「単語は調べてあります」という場面に出くわします。しかし、単語は今述べた過程で意味を成しますので、英文の内容を把握する際、英文に出ている単語一つ一つ調べても勉強にはなりません。runを「走る」だけで終わってはいけません。文全体の中で特に動詞の場合は、その後にくる要素もあわせて考えなければなりません。辞書を惜しみなく引いて下さい。

動詞は、組み合わせ次第でさまざまな意味に成りますのでその組み合わせにも自力で発見し、拾い上げなければなりません。たとえば、その動詞がとる文型、その場合の意味、あるいは、どんな前置詞をとるのか、目的語は不定詞か動名詞か、

that節なのかを確認する必要があります。目にしている英文と辞書を照らし合わせて辞書とじっくりと対話するのです。その過程の繰り返しは語感や推測力を高めたりするのだと思います。調べた単語の語法、用法はノートにまとめておくのも一案かと思います。ここでも、手間を惜しんではいけません。もちろん、いつもじっくりくる語感があるとは限りません。その場合は、例文を使うと良いでしょう。例文をしっかり読み、その例文の状況、内容をよく吟味し未知なる単語の意味を浮き上がらせるのです。また、その際、英英辞典を使うとさらにはっきりします。英英辞典からその単語の意味の範疇が確定されます。

以上のように辞書を使いこなす上で、辞書を中心にして英語学習を試みることをおすすめします。それは、辞書で調べると同時に「読む」ということも意味します。未知なる単語はもちろん、知っている単語や動詞の基本語も改めて調べてみるのも良いでしょう。今まで知らなかった事柄に出くわすかもしれません。この再発見が側面から語彙の力をつけさせてくれます。辞書中心学習は、先にも述べましたが腰を据えて取り組む必要があります。それだけ、「一を聞いて十を知る」的な効果はあります。

この文章は、紙の辞書を使用することを前提に書いています。もちろん、電子辞書の活用も構いません。自宅では、紙の辞書を中心にして便宜的に電子辞書と並行して使うのが良いかと思います。実際、辞書は目的に応じて複数揃えておくことが望ましいです。ここでは、紙、電子両辞書のどちらがよいかということには触れませんが、ある程度、紙の辞書も手になじませておくことも必要だと思います。何度も使用していくうちに、より早く引けるようになりますし、引くことが億劫にもならなくなります。そのことが、電子辞書を使用するときにも役に立つと思います。いずれにせよ、調べる力は、学問の基礎にもなります。詳しい辞書案内や推薦図書は、2008年度「外国語ハンドブック（名古屋語学教育研究室発行）」を参照して下さい。また、LLニュース№36（豊橋語学教育研

究室発行)では「辞書活用法」の特集が組まれていますのでそちらもご覧下さい。

では、最後にこのエッセイの付録として課題を差し上げましょう。次の文章の下線部を辞書を用いて和訳して下さい。これは、Somerset Maugham (英国の劇作家) の *A Writer's Notebook* からの文章です。少し内容が難解な英文ではありますが、英文をみる目を養う練習になります。

Our conduct towards our fellow-men is determined by the principle of self-preservation. The individual acts towards his fellows in such and such a manner so as to obtain advantages which otherwise he could not get or to avoid evils which they might inflict upon him. He has no debt towards society; he acts in a certain way to receive benefits, society accepts his useful action and pays for it. Society rewards him for the good he does it and punishes him for the harm.

語研ニュース読者の学生さん中でこの和訳の添削を希望される方は、筆者のところまで持ってきて下さい。個人添削します。

ロンドンで世界一のミュージカル『レ・ミゼラブル』を楽しむ

経営学部

太田 幸治

ロンドンは、ミュージカルの街

『キャッツ』、『オペラ座の怪人』、『マンマ・ミーア』、『レ・ミゼラブル』。ミュージカルに興味がない人でも、これら作品タイトルのうち、1つか2つのタイトルくらいは聞いたことがあるだろう。これらのミュージカルには共通点がある。それは、これらはすべてロンドン産であるということ。

ミュージカルの街というと、ニューヨーク(=ブロードウェイ)を思い浮かべる人がほとんどではないだろうか。しかし、イギリスはロンドンのウエスト・エンドでもたくさんのミュージカルが製作、上演されており、ウエスト・エンドの劇場は、地元の演劇、ミュージカル・ファンばかりではなく、世界中のミュージカル・ファン、そしてロンドンを訪れる観光客でいつも賑わっている。ウエスト・エンドで上演される演劇は、台詞だけの劇=ストレート・プレイのみならず、ミュージカルにおいてもかなりハイ・クオリティのものが上演されている。それもそのはず、イギリスはシェイクスピアを生んだ国。もともと演劇への感度が高いのである。

このエッセイは、ミュージカル好きの筆者が、ミュージカル好きになった理由と、昨夏ロンドンで観た世界で最も長く上演され続けているミュージカル『レ・ミゼラブル』の感想を綴ったものである。

筆者とミュージカルの出会い～出会いは、『ミス・サイゴン』

そもそも筆者が、ミュージカルに興味を持ったのは今から15年前の大学1年生の時。今以上に純粋で初心^{うぶ}であった18歳の筆者は、今となっては恥ずかしいが映画監督を目指しており、いい映画を撮るためには映画の知識が必要だと信じ、1週間に3本の映画を映画館で見ていた映画バカであった。にも係わらず、大学1年生の夏休みになる頃、「東京に住んでいるのだから、大きな劇場で芝居くらいは見ておきたい。」と感じ、当時帝国劇場で上演されていた『ミス・サイゴン』を見に行くこととなった。なぜ、映画にしか興味がなかった当時の筆者がミュージカルを見に行ったのか、今思うと2つのことがきっかけだったように感じる。ひとつは、筆者が高校生の頃、映画評論家の故・淀川長治さんが「映画しか見ない人は、単なるバカです。映画を楽しむためには舞台やパレエ、美術などの他の芸術の知識があったほうがいい。」といていたのをどこかの記事で読んだこと。いまひとつは、高校卒業直前に何気なく見ていた朝のワイド・ショーにゲストで出ていた市村正親さんが『ミス・サイゴン』の魅力を熱く語っており、その市村という俳優に興味を持ったからだろう。市村正親さん、いまでこそ人気女優の篠原涼子さんのかなり年上のご主人ということで有名だが、いまから15年前はテレビには全く出演しない舞台俳優であった。高校生までは静岡県[・]の浜松市の北にある[・]田舎に住んでいた筆者。自分はこんな田舎にはいてはいけない。大学では東京に行って楽しいことを思いっきりするんだと思っていた時期に、それまで全く知らなかった舞台の魅力、いやミュージカルの魅力を暑苦しく語りまくるサービス精神が旺盛な市村正親という俳優に何かひかれるものがあったのだと思う。

そして『ミス・サイゴン』の観劇である。いまだに忘れられない。約2000席ある帝国劇場。2階席の最後列。舞台に向かって一番左端の舞台から一番遠い席での観劇であった。初めて見るミュージカル。始まる前から興奮していた。とにかく広

い劇場。筆者の席は舞台からはかなり遠いが、舞台の前のオーケストラ・ピットが開幕前に楽器をチューニングするのを聴いて、この後、生演奏で進んでいくであろうミュージカルの贅^{ぜい}沢さにワクワクした。そして開幕。結論から言うと、人生で初めて観る本格的ミュージカルが、この作品で良かったと思う。『ミス・サイゴン』は巨大なホーチミン像や実物大のヘリコプターが出てくるような重量級の舞台装置を使った大掛かりな作品であると同時に、ドラマと音楽とセットが三つ巴となって猛烈な迫力で客席を圧倒するミュージカルだったからである。映画鑑賞では間違いなく味わえないライブ感。2000人のためだけに、踊り、歌い、熱演するすべての出演者たち。観劇中、心が震えっぱなしだった。そして市村正親である。彼の舞台を引っ張る存在感のすごさ。先にも示したとおり、筆者の席は2階席の一番後ろの左側。この劇場で舞台から最も遠い席である。そこに座っている筆者の目に、市村正親は大きく見えた。感覚的には彼がクローズ・アップで見えた。この舞台を見て、筆者は市村正親とミュージカルという演劇形態に取り憑かれてしまった。

一方で、筆者の映画を見る本数は、ミュージカルを見る本数が増えるにしたがって減少していった。それもそのはず。お金が続かないのである。

しかし、不思議なもので、女の子とデートする回数は、ミュージカルを見に行くようになってから増えた。女性は映画好きな男性よりもミュージカル好きな男性のほうが好きなかもしれない。女性に「ミュージカルを一緒に見に行かない？」と誘うと、かなり高い確率でデートにこぎつけることができた。女性は、舞台、とかくミュージカルという華やかなものに魅力を感じるのかもしれない。この語研ニュースを読んでいるモテナイ男子学生諸君。ミュージカル観劇を趣味にすると人生が変わるかもしれないよ。筆者は人生が変わってしまった。以前、私のミュージカル鑑賞熱が最も高かった時代に、ある女性とデートをした。その女性と付き合い始めて最初のクリスマス。私たちカップルは、12月23日、24日、25日と3日連続

で帝国劇場に『レ・ミゼラブル』というミュージカルを見に行った。3日間も同じ作品を見続けるなんて、普通の神経ではできない。私はマニア以外の何者でもなかった。そんな私の趣味に3日間も付き合ってくれた女性は、現在筆者が最も恐れる、いや愛する女性＝妻である。

ウエスト・エンドでミュージカルを観る。

前置きが長くなってしまったが、いよいよロンドンの話に入ろう。

ロンドンの街で人が賑わっているといわれるのは、金融街であるシティと繁華街であるウエスト・エンド。劇場があるのは、ウエスト・エンドの方。約40軒もの劇場が、ロンドンのヘソ、ウエスト・



写真1：早朝のピカデリーサーカス ここがこんなに空いているのは、早朝と深夜のみ。ロンドンのヘソは観光客でいつも賑わっている。



写真2：ピカデリーサーカスにつながるリージェント・ストリートとロンドン名物のダブルデッカー（赤い2階建てバス）

エンドのヘソと呼ばれるピカデリーサーカスから徒歩10分圏内に立ち並んでいる。ゆえに、ロンドンの中心部を歩いていると、演劇、ミュージカルの看板にやたらに遭遇する。また、ロンドンといえば、おなじみの赤い2階建てバス（ダブル・デッカー）に貼られている、ミュージカルのポスターを観ると、ロンドンをつくづく演劇、ミュージカルの街であることが分かる。

筆者がロンドンを訪れるのは、昨年の夏で3回目。1回目は2000年の夏で、ポルトガルに学会発表にいった際にロンドンに立ち寄り、『オペラ座の怪人』、『レ・ミゼラブル』、『キャッツ』の3本のミュージカルを観てきた。2回目は、2001年の春。このときは、マーケティング研究の大御所である和田充夫先生と一緒にいた。当時の筆者は、和田先生をリーダーとしたアート・マネジメントの研究会に参加しており、アート・マネジメント研究・教育の先進国であるイギリスにヒヤリングに行った際にウエスト・エンドで『レ・ミゼラブル』と『オペラ座の怪人』を鑑賞した。この舞台鑑賞は2本とも和田先生とご一緒させていただいた。和田先生が、ダフ屋と交渉して『レ・ミゼラブル』のチケットを安く入手したこと、観劇後、2人で芝居の感想を語り合いながら夜のロンドンの街を歩いたことは一生の思い出である。

そして、昨年の夏。妻と、『オペラ座の怪人』、『レ・ミゼラブル』、『メリー・ポピンズ』を観て来た。

ロンドンへ行くたびに、『オペラ座の怪人』と『レ・ミゼラブル』を観ているではないかと思われる方も多いだろう。その通りである。私はロンドンに3回しか行ったことがないが、ロンドンで『オペラ座の怪人』と『レ・ミゼラブル』を各4回ずつ見ている。もうお分かりだろう。それほどまでにこれらの作品が好きなのである。

ちなみに、日本版の『オペラ座の怪人』は、94年冬に札幌で観て以来、今年の大阪まで14年の間に50回近くは観ていると思う。同じく日本版の『レ・ミゼラブル』も、94年冬の名古屋公演から昨年6月の東京公演まで100回近く見ているので

はないだろうか。はっきり言おう。2作品とも、やれといわれれば完璧に出来る自信がある。台詞、動きともに完璧に頭に入っている。ただ、正確な音程で歌えるかは保証の限りではない。

先にも書いたとおり、ロンドンの街の中には約40の劇場がある。どの劇場も、ロンドンの街並みに溶け込むようなクラシカルでそして重厚な建造物である。『オペラ座の怪人』を上演している Her Majesty's Theatre は、1705年にオープンした歴史のある劇場である（写真3）。外見はクラシカルでも中では、ハイテクを用いたミュージカルが上演されている。

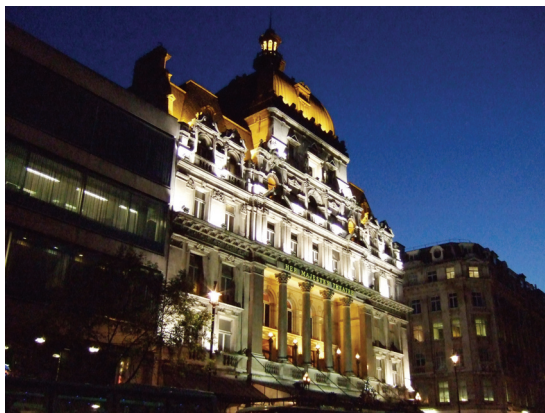


写真3：『オペラ座の怪人』が上演されている Her Majesty's Theatre。夜にはこのようにライトアップされる。

ミュージカル版『レ・ミゼラブル』

世界で最も長く上演されているミュージカルが、ロンドンの『レ・ミゼラブル』である。1986年に開幕したこの作品は、今年で22年目のロングランになる。筆者がこの作品を2000年、2001年に観劇したときは、Palace Theatre で上演されていたが、2004年から Palace よりも少し小さめの Queen's Theatre に劇場を移して上演され続けている。

ミュージカル版『レ・ミゼラブル』について解説しよう。ヴィクトル・ユーゴーの原作本は、日本では『ああ無情』というタイトルで翻訳されており、その大著を読んだことがある方もいるだろう。

ミュージカル版の『レ・ミゼラブル』も原作同様に、ジャン・ヴァルジャンの物語である。パン



写真4：『レ・ミゼラブル』が上演されている Queen's Theatre。この劇場がある通りはとりわけ劇場が多く、複数の劇場が隣接している。隣の劇場では筆者が行く1週間前までハリー・ポッターのダニエル・ラドクリフ主演の『エクウス』が上演されていた。

を1つ盗んだだけで19年も牢獄暮らしを強いられたジャン・ヴァルジャンは、仮出獄で出所した。しかし囚人のヴァルジャンに世間は冷たい。そんななか唯一彼に優しくしてくれたのが司教。司教が優しくしてくれたにも係わらず、ヴァルジャンは、恩を仇で返すように、司教のもとから食器を盗んで逃亡する。すぐに警察に捕まったヴァルジャンを、司教は責めるのではなく、「その食器は私が彼にあげたものだ。そして、銀の燭台^{しよくだい}を彼は忘れていった。」と彼のことをかまう。さらに、司教は、これを使って真人間になれと銀の燭台をヴァルジャンに渡すのであった。自分に優しくしてくれた司教を裏切ったことを情けなく思ったヴァルジャンは、生まれ変わることを決意する。仮出獄の許可証を破り捨て、別人になりすまし、こつこつと働くようになった。

名前を偽りながらも真面目に働き、小さな町の市長にまでなったヴァルジャンは、市が経営している工場で働いている女性ファンティーヌと出会う。ファンティーヌにはコゼットという小さな娘がいるが、自分では育てられずに田舎町の宿屋に娘を預けて育ててもらっている。娘がいたことを隠していたことがばれ、工場をクビになったファンティーヌは、娼婦になるが、病気で死んでしまう。ファンティーヌの娘のコゼットを責任を持って育てると誓うヴァルジャン。しかし、仮出獄の

許可証を破り捨て逃げ続けているヴァルジャンには、彼を執拗に追いかける刑事ジャベールが迫っていた。

ヴァルジャンは、ジャベールの追跡をなんとか振り切り、コゼットを育てた。

10年後、ヴァルジャンとコゼットは、パリでひっそりと暮らしていた。コゼットは、パリの街で学生マリウスに一目惚れする。マリウスもコゼットに一目惚れしてしまう。2人の愛は確認されるが、そこにもヴァルジャンを追うジャベールの影が。ヴァルジャンはジャベールから逃げるべく、パリを去ることをコゼットに告げる。それを聞いていた、マリウスは、コゼットとパリを去ることを選ばずに、仲間たちとともにフランス革命に参加することを決意するのであった。そして…。

以上がミュージカル版『レ・ミゼラブル』の前半部分のあらすじである。

このミュージカルは、一般的なミュージカルと2つの面で大きく異なっている。ひとつは、全編歌で進行すること。それゆえに、突然歌いだしたり、踊りだしたりする一般的なミュージカルとは一線を画す。いまひとつは、重くて暗いこと。一般的なミュージカルは、きらびやかな衣装と照明、そして明るく楽しい音楽で物語が進んでいくのだが、このミュージカルは正反対で、音楽も照明も大変暗くて重い。

こんな内容にも係わらず、なぜ、『レ・ミゼラブル』がロンドンで、いや世界でもっとも長く上演され続けているのだろうか。筆者は、観るたびに感動するポイントが変わるミュージカルだからと理由づけている。筆者自身、ミュージカル版の『レ・ミゼラブル』を100回くらい観ているが、観るたびに楽しめるポイント、感動するポイントが違う。ある時は、ヴァルジャンの苦悩に涙し、ある時は、ヴァルジャンの優しさと偉大さに賞賛を与えた。またある時は、フランス革命に向かう＝死に向かう学生達の生き生きとした笑顔に切なさを感じたこともある。そして、またある時は、ジャベールの信念を貫く姿勢にセクシーさを感じたことも。もちろん、観るたびに演じる役者が違うか

ら感動するポイントが変わることもあろう。だが、それだけではない。この作品で描かれている登場人物たちが魅力的だから毎回異なる感動があるのではなかろうか。

このミュージカルの登場人物は大変多い。主要登場人物が8人いる。その8人の物語が絡み合いストーリーが進んでいく。ヴァルジャンは逃げ、ジャベールは追い、それにフランス革命が絡み、マリウスとコゼットの恋愛も絡むという複雑構造。この複雑構造の話で描かれるのは、登場人物たちの救いのなさ。原作本の邦題タイトルのように「ああ無情」な世界が描かれる。「ああ無情」の世界で生きている登場人物たち。彼らの人生には救いがないのだけれど、皆それぞれが生きている間は必死に生きている。それぞれの価値観を全うしようと必死で生きている。このそれぞれの登場人物たちの生き方に共感する人が多いからこそ、この作品が世界で最も長く上演されるミュージカルになるのだと感じている。

『レ・ミゼラブル』日本公演とロンドン公演

日本版の『レ・ミゼラブル』は、1986年初演で、今日まで断続的に上演が繰り返されている。また来年（2009年）3月には名古屋栄の中日劇場での上演も予定されている。

実は、昨夏ロンドンに立つ前日、筆者は東京で『レ・ミゼラブル』を観劇している。私が観劇したのは日本公演20周年特別キャストで、ジャン・ヴァルジャン役は別所哲也さん、ジャベール役は鹿賀丈史さんであった。この2人の熱演が舞台を引っ張り、日本公演としては十分満足できるものであった。とりわけ印象に残ったのがジャベールを演じた鹿賀丈史さん。鹿賀さんは、初演時にヴァルジャンとジャベールを滝田栄さんとともに交互に演じ、その後の再演からは長い間ヴァルジャンのみを演じていたが、2005年の再演では18年ぶりにジャベールを演じ、今回の公演でも数回のみスペシャル・キャストとしてジャベールで登場した。ヴァルジャンをストイックに追いかけるジャベールを冷徹にそしてセクシーに演じた鹿賀さんのジャ

ペールは絶品であった。

そしてロンドンの『レ・ミゼラブル』である。ジャン・ヴァルジャンを演じたのは、John Owen Jones。彼は、26歳という若さでウエスト・エンドのヴァルジャンを演じ、このとき世界で最も若いヴァルジャン役者といわれた実力派俳優。その後、29歳のときに『オペラ座の怪人』のタイトルロールに抜擢され、ウエスト・エンドで4年間、1400回も怪人役を演じていた。そして、再び、2006年からウエスト・エンドのヴァルジャンに抜擢されていた。ミュージカル・マニアからすると、ヴァルジャンと怪人の両方を、しかもウエスト・エンドで演じることができる俳優は、超一流の役者である。この俳優はまさにそう。歌は上手いなんてものじゃない。難しい『レ・ミゼラブル』のヴァルジャンのナンバーを完璧に歌い上げつつ、役者としてヴァルジャンを見事に演じていて、彼の演技に鳥肌が立った。

一方、ヴァルジャンを追うジャペールは、Hans Peter Janssens というベルギーの俳優。この俳優もすごい。筆者が2000年にロンドンで観たときにはヴァルジャンを演じていた俳優である。そのヴァルジャンが、今度はジャペール役で登場したのである。彼はウエスト・エンドでヴァルジャンとジャペールを演じた唯一の俳優である。鹿賀さんと同じで、ヴァルジャンを演じた後に、ジャペールを演じる俳優は、とにかくカッコイイし、役作りが深い。ヴァルジャンとジャペールは太陽と月という関係にあることがよく分かる役作りだった。

演技も歌も完璧にこなす2人の名優が演じるヴァルジャンとジャペールは、大迫力の対決を見せ、舞台全体をぐいぐい引っ張っていった。また、脇役からアンサンブル（その他大勢の役）まで全員の俳優のレベルが高かった。

ロンドンで『レ・ミゼラブル』を上演しているQueen's Theatre は東京でこの作品が上演されている帝国劇場よりも舞台も客席も狭い。にも係わらず、舞台セットの大きさはほとんど同じだし、出演者の数も同じだから、客席に伝わる迫力が東京の比ではなかった。

役者たちの熱演、それが伝わる劇場により、大感動したロンドンで観る3回目の『レ・ミゼラブル』。あまりの感動に、6日間のロンドン滞在の最終日に再びQueen's Theatre に出かけてしまったほどである。

是非、ロンドンでミュージカルを観ることをお勧めする。ロンドンでも、『ライオン・キング』や『美女と野獣』などのアメリカ産ブロードウェイ・ミュージカルは上演されているが、ロンドンでは、是非ロンドン産のミュージカルを鑑賞して欲しい。そして、その中でも『レ・ミゼラブル』をとりわけ見て頂きたい。筆者はこれまでに、ロンドンで『レ・ミゼラブル』を4回観たが1度の外れもない。常に大当たりのミュージカルである。ロンドンで『レ・ミゼラブル』を楽しむために、来年3月に中日劇場で上演される日本版で予習されることも併せてお勧めする。日本版も最低2回観たほうがいい。それくらい、奥が深いミュージカルである。最後に、もう一度声を大にして言おう。ロンドンではミュージカル『レ・ミゼラブル』を観ることをお勧めする。ロンドンにこの作品を見に行くだけでも往復の飛行機代は無駄ではない。

D.H.ロレンスのキリスト教 批判と異教への傾倒

経営学部
山田 晶子

【ロレンスの生きていた時代】

イギリスの小説家・詩人・思想家であるD.H.ロレンス (1885-1930) は、第一次大戦を体験した人間であるが、この時代にはヨーロッパにおいて文学・芸術にモダニズムと呼ばれる芸術思潮が起った。モダニズムの時代は、19世紀末から第一次大戦 (1914-18) を挟んで1930年代頃までを指すといわれ、英文学史上では1920年代前後にピークを迎えた。モダニズム文学作品の主要な特徴は、既成の価値観への懐疑、キリスト教批判、価値観の相対性、既成の言葉への懐疑、人間の内面・無意識の探求、作品の結末がオープン・エンディングになっていること等が挙げられる。

【ロレンスの生い立ちと作品のテーマの関わり方】

D.H.ロレンスの父親 (A.J.ロレンス) と母親 (L.ロレンス) は、性格や育てられてきた生活・教育環境及び階級が異なっていたために、子供たちが幼い頃から夫婦喧嘩が絶えず、ロレンスも父親が母親に暴力を揮っていたのを見てきたのだが、母親によって父親に反感を持つように育てられた。母親リディアは夫に期待することを諦めた結果、子供たちに立身出世への夢を託すことになった。ロレンスと母親の関係はエディプス・コンプレックスと呼ぶべきものであり、彼はフリーダと結婚するまでに、様々な女性との恋愛において女性とのあるべき関係を確立しようとして苦闘したのだが、それは母親が彼の恋の邪魔をしたことも一因ではあったが、また恋人が彼を所有したがため束縛

したがることから生じる苦悶であった。

ロレンスの母親は禁欲的なキリスト教徒であったが、19世紀にはキリスト教は性愛を抑圧する傾向が特に強かったので、またキリスト教思想に影響されて育てられた彼の恋人たちは彼を支配しようとしたので、彼はキリスト教が自分の恋愛の成就を妨害する一原因であるとしてキリスト教を嫌悪するようになる。彼の内部では、女性＝キリスト教の精神性、という構図が出来上がったのである。キリスト教では、肉体よりも精神性を重視しており、生殖の目的以外で性を営むことを抑圧する傾向があったのである。特にヴィクトリア朝時代にはこの傾向が強くて偽善的な社会風潮になっていた。

一方で、子供の頃母親から父親への嫌悪感を植え付けられていたにもかかわらず、ロレンスは成長するにつれて自分のうちに存在する「男」の性質が自ずから父親的な官能性を発揮してくることを悟り、このことに気付いた彼は、大人になってからは、作品において「男性」性の重要性を強く主張するようになった。

ロレンスは、キリスト教を信仰する精神的な女性を「白い」女性として描き、彼女の強い精神性に苦しめられる男性を解放する方法を探究しているが、それは「光」を命とするキリスト教に対して、異教的「闇」の追求となっていたのである。彼の作品には闇の描写がおびただしくあるが、常識的な、悪としての闇という描写が存在する一方で、独創的であるのが「善」なるものとしての闇の描写である。善なる闇を分かり易く表わした言い方が「黒い神」というものである。そしてこの黒い神と人間の仲立ち人として「黒い男」が登場しているが、キリスト教において「父なる神」と人間との仲立ち人になっているキリストに、「黒い男」は対を成している人物と言える。黒い神は性的な神であり、反キリスト教的である。ロレンスのキリスト教批判は西洋文明批判となっているのでその作品のテーマには社会問題が深く入っており、彼の小説は単なる男女の恋物語ではない。

【闇と黒い神】

黒い男の特徴は反キリスト教的であるため、反伝統的な存在であり、既成の価値観を覆そうとする異端的存在である。キリスト教は「白い神」を戴くが、「黒い神」は主として異教のパン神（ギリシア・ローマ神話に登場する牧羊神）と関連させて書かれているが、またその他の異教の神話であるエジプト神話やケルト神話等に関連して書かれている。

『恋する女たち』（1920）においては、「白い」女性の支配から逃れ、彼女との関係を断ち切って女性との新しい関係を築こうとするパーキンという名前の男性が登場しているが、彼は恋人アーシュラと「究極の性愛」を体験して、アーシュラは彼の説く「星の均衡」という関係を徐々に理解していく。そして二人は「善なる闇」を知るのである。パーキンは「黒い」男として描かれ、アーシュラは「白い」世界から彼によって救い出されたのである。『チャタレー卿夫人の恋人』（1928）においては、再び「黒い」男として身分が労働者階級の森番メラーズが登場して、コニーという貴族の令夫人を性愛を介して救い出す。

ロレンスはキリスト教会と戦い続けてきたのであり、彼の「黒い神」は、その思想を表わす中核となる用語なのである。また、ロレンスは男と女の対立を描いているが、最終的には両者の均衡を望んでいるのである。彼のキリスト教への反発は既成の価値観への反発であり、彼は新しい社会を求めるに当たって、文筆活動によって徹底的に古い社会と戦ったのである。彼は44歳という若さで亡くなったために、世界中に影響を及ぼしてきた名作『チャタレー卿夫人の恋人』がイギリスで裁判に勝訴した（1960年）ことも知らないままであった。しかし彼の戦いは勝利となり、『チャタレー卿夫人の恋人』は現在世界中で完全版を読めるようになっている。

現在自然を大切にしようという運動が広がっている。ロレンスは「光」を善と考えることによって文明を行き過ぎたものにまで進めている人間の思い上がりを憤り、植物や動物を人間と対等に扱っ

て書こうとした。このような自然の意味を備えた彼の作品の思想である「闇」と「黒い神」は、今後も世界にとって重要なものであると思われる。

注：本稿は、2008年度春学期に筆者が担当した科目「総合演習」の講義ノートの一部に加筆したものである。

中国のスヌーピー

現代中国学部
藤森 猛

中国のアニメブーム

中国の青少年の間では、1990年代から外国のアニメーションブームが起こり、映画・テレビやコミック本などの作品では日本アニメの人氣が最も高い。例えば、小学生では『柯南』（名探偵コナン）、『蠟筆小新』（クレヨンしんちゃん）、『櫻桃小丸子』（ちびまる子ちゃん）などのテレビアニメに代表され、中学生以上では『隣居豆豆龍』（となりのトトロ）、『幽霊公主』（もののけ姫）、『千と千尋』（千と千尋の神隠し）などの宮崎駿作品や『新世紀福音戦士』（新世紀エヴァンゲリオン）に代表されるSFアニメ作品などが、アニメブームの火付け役となっている。

また中国では、アメリカのアニメ作品も日本アニメに次いで人氣が高い。一つには、「米老鼠」（ミッキーマウス）や『白雪公主』（白雪姫）、『美女と野獣』（美女と野獣）、『小美人魚』（リトルマーメイド）などのヒロインものに代表される“迪斯尼”（ディズニー）作品であり、一つには“史努

比”(スヌーピー)に代表されるピーナツブックスである。

スヌーピー人気

『史努比漫画経典系列』(ピーナツブックス)は、1922年生まれの“査爾斯M・舒爾茨”(Charles M. Schulz)が、1950年から掲載を始めた新聞漫画作品で、アメリカでの大ヒットを経て各国に伝わり、日本でも詩人の谷川俊太郎の名訳で70年代からブームが続いている。

中国では、WTO加盟(2001年)に先立つ99年の米中交渉で、中国がハリウッド映画に対する輸入自由化(当初は年間40本)を認めたことに伴い、90年代末からディズニー作品などの映画やコミックが大量に流入した。そうした中で、中国でもスヌーピーが人気のキャラクターアニメとして一人歩きを始めた。

ピーナツブックスは、“查理・布朗”(チャーリーブラウン)が主人公で、理髪店で働く父を持つ作者のシュルツが、自分自身を描いたとされる。登場人物は子どもと動物だけで、中でも人気キャラクターとして圧倒的な支持を得ているのは、チャーリーブラウンの飼い犬のスヌーピーと相棒の小鳥“糊涂塌客”(ウッドストック)である。またチャーリーブラウンの友達の“露茜”(ルーシー)、ルーシーの弟“莱纳斯”(ライナス)、チャーリーブラウンの妹“莎莉”(サリー)などのキャラクターも人気が高い。他にもチャーリーブラウンの友達の“史洛德”(シュレーダー)、“薄荷・派蒂”(ペパーミント・パティ)、“瑪茜”(マーシー)などたくさんの登場人物がキャラクター化して、衣類、玩具、文具、ファンシー用品、食品などのグッズに登場している。80年代～90年代前半に中国の町を歩いた時には、スヌーピーの“T恤衫”(Tシャツ)をみかけることはなかったが、最近では、例えば背広を着たサラリーマンをみると、そのワイシャツの下からスヌーピーのTシャツの絵が透けて見えるようなケースに遭遇する場合がある。

言葉の宝庫ピーナツ

スヌーピーの漫画は、いくつかの出版社から中

国語に訳されているが、ここでは『史努比，你家失火了』(Your House On Fire!! Snoopy) (許時嘉訳、双大出版公司、2003年)を例に、ピーナツブックスで使われる代表的な擬声語の中国語訳を紹介する(日本語訳は谷川俊太郎訳『おうちが火事だ!! スヌーピー』ツル・コミック社、1971年を参照)。

作品では、子どもたちが野球をするシーンが多い。例えばチャーリーブラウンがバットでボールを打った「カーン (Whap)」という音は“啞啞 kuānglāng”、ピッチャーのチャーリーブラウンに打者の打球がぶつかる「カーン (POW)」という音は“砰 pēng”、スヌーピーがボールを口でキャッチした「バクッ (CLOMP)」という音は“噗咚 pūdōng”、スヌーピーが口でくわえたボールをチャーリーブラウンにパスする音「ブイ (Ptui)」は“噗 pū”と訳される。

またこの“噗咚”という中国語の音訳は、ピーナツブックスで多用される擬声語の一つとなっている。例えばウッドストックが空を飛ぶ「パタパタ (Flutter Flutter)」という音は“啾啾喳喳 pālipālā”であるが、ウッドストックが地面に墜落する「ゴツーン (KLUNK)」という音は“噗咚”で訳されることが多い。

中国産の“史努比”(スヌーピー)のTシャツを着て、中国語版のスヌーピーのアニメを見て、スヌーピーのコミックを中国語で読む。語学の楽しい会話練習のために、みなさんに勧めたいと思います。



中国語に翻訳されたスヌーピーのコミック本

蝶と蛾

経営学部
安藤 聡

蝶と蛾は断じて別な生き物である。私は小学校時代にはかなりの昆虫マニアだったが、とりわけ蝶にはただならぬ関心を寄せていたが、蛾だけはどうしても好きになれず、触ることが出来なかっただけでなく見るのも嫌だった。

アゲハモドキというクロアゲハに似た黒い蛾がいる。ある夏の午後、小学校からの帰り道、妙にぎこちない飛び方をするクロアゲハらしき「蝶」を見かけ、何の気なしに帽子で捕獲したところ、それはアゲハモドキだった。アゲハモドキは蛾だが、クロアゲハに似ているので、その時はそれほど嫌悪感を抱かなかった。ところが、しばらくその蛾を手を持っていると、次第にそれが蛾であるという事実に耐えられなくなり、怖くなってそのアゲハモドキを手放し、道端の木の葉で手を拭いて、何故か鼻血を出してしまった。蛾に対する嫌悪感や恐怖感と鼻血に因果関係があったのか否かは、今でもわからない。

私が通っていた南永山小学校のすぐ裏には小さな山があり、自然環境にはそれなりに恵まれていたのだが、それゆえに秋になると巨大な蛾が飛来し、校舎の壁面に張り付いていることがよくあった。ヤママユガとかクスサンとかウスタビガとかそういう種類である。私はこれが嫌で仕方がなかったのだが、生来の負けず嫌いも手伝って、どうしてもこういう蛾が怖いとは言えなかった。それで、何事もないかのような顔をしてこのような嫌悪すべき鱗翅類が張り付いている壁の近くを通り過ぎ

るときの緊張感は、今でも忘れられない。

中学一年の時、国語の教科書でヘルマン・ヘッセの短編集『蝶』の中の一編「クジャクヤママユ」を読んだ。語り手の「私」に友人のハインリヒ・モーアが少年時代の追憶を語るという設定で、彼ら少年たちは蝶の採集を趣味としていてその標本を自慢し合っていたという。モーアの家は貧しかったので、彼の標本は粗末な空き箱とコルクを再利用したものだったが、金持ちの家の優等生エーミールが作るそれらは実に立派なものだった。ある日、そのエーミールがそれまで誰も採集したことのないクジャクヤママユを捕獲した。モーアは彼の部屋にそれを見に行ったときに、まだ展翅板に乗せられていたその珍しい蛾をそっとポケットに忍ばせて盗み出してしまう。家に帰って自責の念に苦しんだモーアは、母親に促されてエーミールに謝りに行く。彼に返そうとしたクジャクヤママユはしかしながら、羽が少しだけ破損してしまっていた。エーミールは怒る代わりにモーアを心から軽蔑した態度を取る。罪悪感と自己嫌悪に耐えかねたモーアは家に帰って、それまで苦労して集めた蝶の標本をすべて泣きながら壊してしまう。

この物語が『蝶』というタイトルの本の中の一編であることはその教科書にも明記されていたし、「私」もモーアも本文中で確かに「蝶の蒐集」などと言っている。だが話題の中心になっているのはクジャクヤママユという蛾である。私の大嫌いなヤママユガの一種だ。しかも冒頭でモーアが「私」にこの追想を語り始めたきっかけというのが、「私」が最近（子供と一緒に）また「蝶の」採集を始めた、と話し、ひとつの標本をモーアに見せたことだった。だがその標本の「蝶」というのはワモンキシタバという蛾である。何故「蝶」と言いつつ蛾の話ばかりするのだろうか。中学一年の私は釈然としない気持ちを禁じ得なかった。だが私は疑問があっても教師に質問をするようなタイプの生徒ではなかったため、この問題を国語教師に問い質すこともしなかったし、また授業が終われば教科書の内容などすぐに忘れてしまうので、級友とこの問題について議論することもなかつ

た。国語の授業が次の単元に入ると、有り難いことにクジャクヤママユもワモンキシタバも忘却の彼方に飛び去ってしまい、その後何年もこの問題を思い出すことはなかった。

その後、確か大学一年の時だったと思うが、フランス語では「蝶」も「蛾」も ‘papillon’ であるという事実を、フランス語の授業で知った。これは「パピヨン」と読む。ついでながらパピヨンという犬は、耳が蝶の羽のような形だからそう呼ばれるのだ。もちろんフランス語に蝶と蛾の区別がまったくないというわけではないが、「蛾」は ‘papillon de nuit’ あるいは ‘papillon nocturne’ (いずれも「夜の蝶」の意。ついでに、「ノクターン」は音楽用語では「夜想曲」と形容語句を付けて区別しなければならない。つまり、‘papillon’ という同じ範疇の中の下位区分、という程度の位置づけに過ぎないのである。一方英語では、日本語と同様に、蝶は ‘butterfly」、蛾は ‘moth’ というように、初めから異なった範疇に分類される。石原慎太郎はかつて、フランス語は数も満足に数えられない不完全な言語だ、と暴言を吐いたが(これはフランス語に「70」とか「80」という単語が存在せず、「60と10」(soixante-dix)とか「4つの20」(quatre-vingts)と言わなければならないことについて言っていると思われる)、私が思うにそんなことよりも蝶と蛾を一緒くたにしていることの方がよほど問題である。

このように、美しく愛らしい蝶と醜く不気味な蛾を同じカテゴリーに分類するというのは、私の常識ではまったく考えられない暴挙なのだが、フランス語におけるこのような暴挙について知ったとき、クジャクヤママユとワモンキシタバをめぐる疑問をふと思い出し、もしかするとドイツ語においても同じような狼藉が行われているのではないかと、思い至り、ドイツ語選択の友人に手伝ってもらいつつ慣れないドイツ語の辞典を借りて引いてみたりした。ドイツ語には蝶と蛾を総称する名詞が二つあり、ひとつは ‘Schmetterling」、もうひとつは ‘Falter」である。ドイツ語では名詞の語頭はすべて大文字になるという事実も、この時に

知った。ちなみにヘッセの『蝶』の原題は *Schmetterlinge* である。そしてドイツ語で蛾を蝶と区別して言う場合には ‘Nachtfalter」と言うのだが、これも「夜の蝶」(Nacht + Falter)を意味する。だがいずれにせよ、ドイツ語の世界でも蝶と蛾は同じものと認識されているのだ。だから「私」とモーアは、「蝶」と言いつつ蛾の話ばかりしていたのだ。生物学的なレベルは別として、日常会話のレベルでは可憐な蝶と醜悪な蛾が、あるう事が同一の生き物と考えられているのである。

その後何年も経ったある日、ふと他の言語ではどうなのかということが気になり、手許に辞書があった言語のみだが、蝶と蛾について調べてみた。アイルランド語では ‘féileacán」が蝶と蛾の両方を意味し、‘féileacán oíche」が「夜の蝶」すなわち「蛾」を意味する。(そう言えば、かつて知り合いのアイルランド人から贈られたマグカップには、蛾と思いき昆虫が描かれていた。私はこれを、アイルランドにのみ生息する珍しい蝶だと思うことにして、このカップを愛用している。) ウェイルズ語で蝶を表す語句には ‘glöyn byw」、‘iâr fach yr haf」、‘pili-pala」があり、一方で蛾は ‘gwyfyn」である。ちなみに ‘glöyn byw」は原義が「石炭の(黒い?) 生き物」らしいのでおそらくは黒い蝶のこと、‘iâr」は「雌鳥」、‘haf」は「夏」だがそれ以上のことは不明、‘pili-pala」は純粋に「蝶」という意味のようだ。いずれにせよ、ウェイルズ語では蝶と蛾が真っ当に区別されている。スペイン語では ‘mariposa」が蝶と蛾の両方、‘mariposa nocturna」が「夜の蝶」すなわち「蛾」、さらに ‘polilla」が「蛾、もしくは蛾の幼虫」である。スペイン語の専門家が身近にいないので確認できないが、おそらくは羽が大きくて普通に飛ぶ蛾と、蚕蛾のように飛ばない蛾を区別して、後者を ‘polilla」と称しているのではないだろうか。ラテン語では ‘papilio」が蝶と蛾、‘blatta」がゴキブリと蛾、‘tinea」が地虫、ウジ虫、蛾である。ここでは蛾が三種類に分類されている。蝶のような形のもが ‘papilio」(フランス語の ‘papillon」はこれを語源とする)、ゴキブリのような形のもが

‘blatta’、そして羽が小さくあまり飛ばないものが‘tinea’なのであろう。そして中国語では、蝶が「蝴蝶」、蛾が「蛾子」である。流石に4000年の歴史を誇る中国文化においては、美しいものと忌まわしいものが真っ当に区別されている。

このように、事物や概念の分類の仕方は言語によって異なるものである。例えばH₂Oという物質は液体の状態の時、日本語ではその温度によって「水」と「湯」というように呼称が変化する一方で、英語ではペットボトルに入っている水でも薬罐の中で沸き立っている水でも「water」と称される。英語でどうしても「湯」を区別して言いたいときには、‘hot water’というように形容詞を用いなければならない。日本語の「絵」は「水彩画」、「油絵」、「線描画」などの総称だが、英語では水彩画と油絵が‘painting’、線描画が‘drawing’という分類になり、さらにこれらの「絵」と「写真」‘photograph(s)’ / ‘photography’、「映画」‘film’を総称した‘picture’という上位概念がある。日本語でこれらを総称するには「画像」、「映像芸術」など、文脈によって言い換えなければならない。また英語には、日本語で言う「絵」だけを区別して言う語がない。一方で日本語で「蜂」と総称している昆虫を英語では‘bee’、‘wasp’、‘hornet’に分けている。最初の‘bee’はミツバチ、ハナバチなどで、特にミツバチに限定するときには‘honeybee’と言う。日本では蜂マニアというのはあまり一般的でないようだが、英国ではミツバチやハナバチは蝶の次に人気のある昆虫だ。次の‘wasp’は『ジーニアス英和辞典』では「ジガバチ、スズメバチ」と定義されているが、英国には日本にいるような種類のスズメバチは棲息していないため、英語で‘wasp’と言えば普通はアシナガバチを指す。最後に挙げた‘hornet’は「スズメバチ、クマバチ」など大型の蜂を指すが、この単語自体を英国で耳にした記憶はない。「シマウマ」は日本語なら「縞模様のある馬」ということで、馬の一種と捉えられているが、英語では‘zebra」という、‘horse’とは無関係の生き物である。日本語では「腕時計」も「柱時計」も「時計」だが、

英語では‘watch’と‘clock’は別のものである。ちなみに、床に設置するタイプの大型の柱時計を英語で‘grandfather clock」という。

たとえば馬が走る速度によって動詞を使い分ける習慣が日本語にはなく、ただ「走る」としか表現できないが、英語では遅い方から順に‘amble’、‘trot’、‘pace’、‘canter’、‘gallop」と使い分ける。一般に家畜関係の語彙は英語の方が日本語より遙かに細かく分けられている。牛は日本語ではまず「牛」という総称があり、そこに形容語を付加して「子牛」、「肉牛」、「乳牛」などと称するが、英語では‘bull’（去勢されていない雄牛）、‘bullock’（去勢された雄の荷役用の牛）、‘calf’（子牛）、‘cattle’（集合的に家畜としての牛）、‘cow’（雌牛、乳牛）、‘heifer’（子を産んでいない若い雌牛）、‘ox’（去勢された雄牛）、‘steer’（去勢された食肉用の雄牛）と呼び分けなければならない。そうすると例えば車の助手席に乗って英国の田舎道を走っているときなどに、前方に一頭の牛がいて、しかも運転者がそれに気付いていない様子だったりした場合、「気を付けろ、牛がいるぞ」と言おうとしてその牛がこれらのうちどれなのかをとっさに判断できず、言い淀んでいるうちに車が牛に激突してしまった、というような珍事が起こりかねないような気もするが、そういう時にはとりあえず‘cow’と言っておけばよい。「豚」の場合には英語にも‘pig」という総称があるが、その下位区分として‘boar’（去勢されていない雄豚）、‘hog’（去勢された雄豚）、‘sow’（雌豚）、‘piglet’（子豚。これは単に‘pig’に「小さいもの」を示す接尾辞‘let’が付いただけ）などがある。

逆に英語では‘rice」としか言わない所を日本語では「稲」、「粳」、「米」、「御飯」あるいは「飯」、「ライス」（一説によると茶碗に盛られているのが「御飯」あるいは「飯」で、皿に盛られているのが「ライス」だそうだ）と呼び分けるという例もある。また日本語では服を「着る」、靴を「履く」、帽子を「被る」、マフラーを「巻く」、ベルトを「締める」、眼鏡を「かける」、指輪を「はめる」、リュックサックを「背負う」、髭を「生やす」、香

水を「つける」、表情を「浮かべる」と動詞を使い分けるのに対して、英語ではすべて ‘put on’ と ‘wear’ で表現する（前者が身につける動作、後者が身につけている状態。たとえば「髭」には前者は用いないが、付け髭の場合には用い得る）。

これはよく引き合いに出される例だが、英語には「兄」と「弟」、「姉」と「妹」の区別がなく、単に ‘brother’ と ‘sister’ である。どうしても区別したいときには ‘elder sister’ なり ‘little brother’ なりと形容詞を用いるが、通常は殊更に区別しない。そして英語には「先輩」「後輩」に相当する語が存在しない。要するに日本語文化圏では年齢の上下が大いに問題になるのに対して、英語文化圏ではそれが大した問題ではない、ということである。また日本語では、一人称（「私」「僕」「俺」「拙者」「それがし」など）と二人称（「あなた」「君」「お前」「貴様」「汝」など）に気が遠くなるほどのヴァリエーションがあるが、英語ではつねに ‘I’ と ‘you’ である（二人称には古くは単数形の ‘thou’ と複数形の ‘ye’ があったが）。これはもちろん、日本語を使う社会の方が人間の上下関係に敏感だという事実を反映している。

他にもたとえばイヌイットの言語には「粉雪」や「牡丹雪」などいろいろな雪を表す語彙が数多存在するが「雪」という総称は存在しないとか、ロシア語には「荒い毛織物などが肌にちくちくする」ということを一語で表す動詞があるとか、イタリア語にはマカロニの種類を意味する単語だけでも500語以上あるとかいった事実が如実に示すように、事物や現象の境界線は言語によって大きく異なり、またどんな言語もつねに様々な形でその国や地域の文化を反映する。

ところで、言語の話とは別なレベルで、実に許し難い話だが、蝶と蛾の生物学的分類の境界線はそれほど絶対的なものでもないらしい。例えばセセリチョウ科の蝶は実は蝶と言うよりもむしろ蛾に近いという。近い将来この種の蝶についての研究が進んで、これらが蛾に分類し直された場合、私はそのニュースを読んだ瞬間からこの種の蝶には触れることが出来なくなるであろう。また、私

の個人的見解では、ヤマキマダラヒカゲとサトキマダラヒカゲ（私の小学校時代にはこれらは単に「キマダラヒカゲ」という一種の蝶だったが、のちに別種と見なされるようになった）は是非とも蛾に分類して欲しい。幼少の頃から私は、蝶の中でもこの種類にだけは（羽の模様が不気味すぎるので）触ることが出来なかったのだ。

(海外最新事情)

イギリス

(1) 人口流出

前回の『語研ニュース』のこのコーナーに英国への人口流入増加を巡る一連の動きについて書いたばかりだが、同時に英国からの人口流出が顕著になっているということを2008年5月20日の『テレグラフ』紙の記事で知った。最近10年間で英国から海外に移住した人の数が戦後最高(確認はされていないがおそらくは過去最高)になっているという。

この記事によれば、1997年から2006年までに英国から流出した人口は約197万人であり、2006年だけでも20万人以上がこの国から外国に移り住んでいる。また英国在住の外国籍を持つ人々も158万人ほど、同じ10年の間に英国を退去しているらしい。

公共政策研究所 (the Institute for Public Policy Research, 略称 IPPR) の研究員ジル・ラターはこの現象を以下のように分析している。すなわち、引退して海外に移住する人が増えていること、労働力の国際間流動が顕著になって短期間(一年ないし数年)国外で働くという事例が増えてきたこと、また外国から移住して来て英国籍を取得したのちに再び海外に移住する人が多くなっていることなどがその背景にあるとのことだ。一方で野党の各党はこの現象を、犯罪の増加と税率の高騰に嫌気がさして英国から逃げ出す人々が多くなったからだと主張している。影の内閣 (shadow cabinet: 野党第一党—この場合保守党—の党首が各省庁を担当する閣僚を任命して組織する) の内務大臣デイヴィッド・デイヴィスはここぞとばかりに「労働党政権下のこの国の惨状を反映してい

る」と述べている。

他国や他の地方へ「移住する」ことを英語で‘migrate’ (名詞形は ‘migration’) という。ラテン語の ‘migrāre’ (「移動する」) が語源だ。この ‘migrate’ はA国からB国へ「移住する」ということを客観的に叙述する場合に用いる動詞で、外国から本国へ「入って来る」場合の「移住する」は ‘immigrate’ (in + migrate)、逆に本国から外国へ「出て行く」場合の「移住する」は ‘emigrate’ (e + migrate) である。この『テレグラフ』の記事の見出しは ‘Two million Britons emigrate in 10 years’ だった。

(2) プレハブに泊まってオリンピックを見に行こう

2012年7月下旬から8月中旬にかけて、ロンドンで夏季オリンピックが開催される。そうすると、ただでさえホテルが激しく高いロンドンの至る所で、宿泊施設の不足という事態が発生することが容易に予想出来る。そこで、大手ホテルチェーンのトラヴェロッジ (Travelodge) がプレハブ式のホテルを数カ所に設置することを計画しているという。

2008年5月14日の『タイムズ』の見出しには ‘Pre-fab hotels for visitors to London Olympics’ とあったので、建設現場や校庭の片隅でよく見かけられないいわゆるプレハブ小屋を宿泊施設として使うのか、と思ったが、そういうことではないらしい。記事によればそのプレハブホテルは120室を擁する大規模なもので、中国で製造されてロンドンに輸送され、組み立てられてオリンピック期間中ホテルとして使われたのち、分解されて運び去られまた別な場所で組み立てられて使われることになるらしい。普通にホテルを建設する場合よ

りも工期を4分の1、費用を10分の1ほど削減できるという。6月に第一号店が北西部のアクスブリッジに開店し、年内にヒースロウ空港の近くにも完成する予定である。宿泊費は最低で一泊19ポンド（約4000円）とのことだから、ロンドンのホテルとしてはかなり安いと言える。尤もトラヴェロッジには3週間以上前に予約すると最低で一泊19ポンドになるという割引制度があるから、単にこれが適用されるということであろう。オリンピック期間だからと称して特別に高い料金を設定しないのは良心的だ。ただどんな時でも物事の悪い面にばかり注目する人というのがどこにでもいて、『タイムズ』の記事によれば「輸送時に排出される二酸化炭素の量も考えなければならない」という意見も出ているという。尤もこの指摘をしているのは建設業界の人らしいので、簡素化された工事によって仕事が減ることに対する苛立ちもその背景にあるに違いない。

「プレハブ」という日本語は、また‘pre-fab’という英語は、‘prefabricate’の省略形である。接頭辞‘pre’はご存じの通り「前の」とか「前もって」の意であり、‘fabricate’は「組み立てる」という意味だ（ラテン語‘fabricāre’「組み立てる」から）。外枠となる部分を「前もって」「組み立てて」おいて、それをさらに現地で組み立てるということなのである。

トラヴェロッジは1930年代末期の米国に起源を有するが、現在は英、米、愛、加、豪にそれぞれ独立した会社を持つ。英国のトラヴェロッジは高速道路のサービスエリアや国道沿いに広大な駐車場を併設した郊外型のビジネスホテルが多い。

（安藤 聡）

韓 国

韓国の“おばさん”たちは今...

2008年3月8日に放映がはじまったMBCの連続テレビドラマ「わが生涯最後のスキャンダル（내 생애 마지막 스캔들）」が人気を呼んでおり、

視聴率30%を越えそうな勢いであるという。

かつては自他ともに認める美人であったチェ・ジンシル扮するホン・ソニは、いまや典型的な“おばさん（아줌마）”と化している。夫は事業に失敗して監獄行き、金の工面に追われるという最悪の日々。そんな時、20年前の初恋の相手でいまはソン・ジェビンというトップスターになっているチョン・ジュノ扮するチョン・ドンチョルから電話がかかってくる。二人は再会するが、昔の風貌をまったく失ったソニの姿にドンチョル（ジェビン）はびっくり仰天。会ってしまったのが運の尽き、後悔先に立たず。ソニから何とか逃れようと冷たくあしらうが、彼女の境遇に不憫を感じはじめ、助けてやろうとするうちに昔の感情がよみがえり……。現実味ゼロのこのドラマ、「おばさんシンデレラ物語（아줌마 신데렐라 스토리）」のジャンルに属すのだそうである。

では、上で書いた「典型的な“おばさん”」とはどんな“おばさん”なのか？「キョンイン日報」のホームページ（<http://www.kyeongin.com/>）に掲載された2007年10月23日付けの「『第三の性』否定的偏見に終止符を打って……」によれば、次のような特徴を持っている。

- (1)身体的特徴：やばったくぼてつとしたスタイルにパーマ頭。
- (2)対人関係：ずうずうしく気がきかず、体面をつくらわない。
- (3)性格の特徴：自分の考えにとらわれ、しつこい。

しかし、このような否定的イメージはもう消えつつあるという。現在、社会的に定義される“おばさん”は、「機会があれば何でもやりとげることのできる潜在力のある社会集団として評価され、消費を引っ張る階層としてその影響力を発揮している」のである。ちなみに、フランス政府観光局が発行した「韓国観光市場研究報告書」は、“おばさん（Adjumma）”を「40代以上の家庭にいる韓国女性たちで、子女をみな育て上げ、時間と経済的余裕のある女性たち、高い購買力を持つ韓国特有の集団」と定義しているという。

社会的集団としての“おばさん”概念が登場したのは1970年代からで、初めは否定的なイメージはなかったらしい。当時は、家庭をやりくりしながら情の深い伝統的“おかあさん”を象徴する「下宿の“おばさん”」に代表され、庶民的で人情深いイメージを持っていた。80年代になると、経済的環境の変化と不動産ブームが起こり、「福婦人（不動産投機をする家庭婦人）」の性格が強くなって、やや否定的なイメージが生まれた。その後、90年代前半には、お嬢さんばい“おばさん”を指す「미시 (missy)」という言葉が流行したが、90年代後半には経済的危機（IMF危機）を克服するために既婚女性が直接的に社会活動に参加するようになって、「気がきかず、ずうずうしい“おばさん”」という否定的なイメージが形成された。

しかし、最近になると、既婚女性の社会的・経済的参加が質的にも量的にも拡大し、“おばさん”に対する観念も変わりつつある。とくに、オンライン環境等を中心に、情報力を持つ“デジタルおばさん”という新しい“おばさん”集団が急速に拡大しており、社会、経済、消費文化等に多様な影響を与えるにいたっている。

ようするに、「気がきかず、ずうずうしい“おばさん”」という否定的なイメージは、“おばさん”たちが社会的活動にいつそう参加するようになり、経済力を増したことで、社会的に表出された彼女らの行動特徴が目立つようになって生まれた一種の社会的偏見であり、“おばさん”たちに対する評価を変えなければならない、というのが「『第三の性』否定的偏見に終止符を打って……」の主張なのである。

一方、2008年4月20日に配信された「聯合ニュース」の「韓国のおばさんが変わりつつある」という記事は、やや異なる側面からの論評になっている。この記事は「テホン企画」が“おばさん”たちのライフスタイルの変化について調査した“Ajumma & The City”を紹介したものであるが、記事の副題が「伝統的良妻賢母からファミリー・ビジネスのCEOへ」となっていることから分かるように、“おばさん”たちが財テクの主導権を

握っていることに焦点をあてている。“おばさん”たちは夫の給料に依存するよりも、主導的に財テクに精を出し「良妻賢母」になっているが、それでも子供の教育が相変わらず生活の大きな部分を占めていること、特に教育費が支出の32.8%を占め、高校生の子供の場合には月平均の私教育費（塾や家庭教師に支払う金額）がなんと92万ウォン（約10万円）にも達していることなどを紹介している。

財テクの話が出たついでに——冒頭で紹介した「わが生涯最後のスキャンダル」の第二話で、金の工面に苦しむソニが、尿失禁手術を受ければ500万ウォンの保険金が入ると知り、尿失禁と偽って手術を受けようとするが、女医との話のすれ違いから別の手術（ここではどんな手術が書けません）を受けてしまい、保険金どころか200万ウォンの出費が必要になってしまったというお笑い場面がある。その中で「尿失禁財テクがひところはやったじゃないか」という意味のセリフが出てくる。この場面について、関係学会から誤りが多いという指摘がなされているらしいが、「尿失禁財テク」という言葉は実在するようである。あるWebサイト（<http://www.mydaily.co.kr/>）の中の記事を引用しておく。「『尿失禁財テク』」というのは、一部保険会社で、一時、中年尿失禁患者たちの治療のために作られた商品で、尿失禁手術を受けると500万ウォンほどの保険金を受け取ることができるようにしていた商品。実際の治療技術がよくなり、数十万ウォンですみうる手術であるので、過去の保険約款当時に設定された手術費用500万ウォンは実際よりも過多の設定となってしまうために、中年女性たちの間で、一時、財テク手段として活用されたことがある。」

（付記）「わが生涯最後のスキャンダル」は土・日の週2回放映なので、本紙が出るころには終了していると思います。もし日本のテレビで放映されることがあれば、見てみてください。

（田川光照）

第13回 外国語コンテスト

英語部門

英語部門は11月27日（火曜日）に実施され、12名の参加者が自作の英語スピーチを発表した。

審査員には、ジョン・ハミルトン先生と祖父江美穂先生をお迎えした。十分な準備と練習の成果が伝わってくるスピーチが次から次へと披露され、そこから入選者を選ぶというたいへん難しい選考を、審査員の両先生にお願いすることになった。

審査の結果、第1位 野々山恵さん、第2位 三浦紳吾くん、第3位 西部香里さんが入賞者として選ばれた。

野々山さんの“Living in the Global Community as Japanese”は、英語を学びたいと思ったきっかけや高校時代のオーストラリアでの学びを踏まえ、単に外国語を学ぶだけでは十分でないことが、説得力のある文にまとめられ、“To be a world citizen, I want to study hard and broaden my knowledge about the world in the years to come.”と締めくくられていた。三浦くんの“My Precious Experiences in Australia”は、オーストラリア旅行中での会話や図書館やスーパーマーケットに行ったこと等の具体例を挙げながら、異文化体験を生き生きと描いていた。西部さんの“KY”は、「空気読めない」という流行語をとりあげ、“KY”が何かということを学んだ状況を見事に描写し、そこから学んだことを上手にまとめている。

入賞者以外の作品も力作揃いであり、今後もそれぞれに考えたことを深めて英語で表現するという機会をもってほしいと思いつつ、2007年度のスピーチコンテストを終了した。 (小坂敦子)

ドイツ語部門

2007年度の名古屋語学教育研究室主催第13回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2007年12月4日（火曜日）の午後4時45分より名古屋校舎中央教室棟3階にある第1研修室でおこなわれました。その結果を簡単ですが、報告したいと思います。

今回課題としたのは、統一テキストの中のReihe 6の„Was willst du eigentlich werden?“（「あなた、いったい何になるつもりなの？」）という題名のダイアログです。2人の男女（オーストリア人女性とイタリア人男性）が将来について話をするという設定ですが、決して固い内容ではなく、ユーモアのある対話に仕上がっています。

例年であれば2年生以上を対象にして参加者を募っていましたが、毎年参加者のレベルが高くなっていますので、今年は1年生から積極的に参加を呼びかけってみました。その結果、ドイツ語部門としてはかつてない多数の申し込みがあり、21名もの参加者となりました。そのうちの半数近い9名が1年生でした。

審査にあたったのは、ドイツ語担当教員である法学部所属の竹中克英先生と経営学部所属の私（島田了）の二人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

授業で扱っているテキストとはいえ、まだまだ学習時間の少ない1年生にとってはかなり難しい課題だったといえるでしょう。基本となる発音・アクセントの確かさはもちろんのこと、今回はユーモアのある対話ということで、より表現力が必要とされます。それでも参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、互いの学年を意識させない高いレベルでの完成度を競う結果になりました。

参加者いずれも優劣つけがたく、本当にわずかの差で順位を決めざるを得ませんでした。結果は、第一位（優勝）大橋一寛さん（07J1349）、第二位水野圭助さん（06J1162）、第三位鷺見真一さん（07J1126）となりました。上位三名のうち2名が1年生ということで、集中して練習したものと思われ、素晴らしい結果を出しました。

他の外国語に比べて履修者の少ないドイツ語部門で、今年はこれだけの参加者があった事は大変素晴らしいことです。ドイツ語の履修者の関心や質の高さは大いに評価したいと思います。今後もこの傾向が続くように努力を重ねたいと思います。法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心としたキャンパスのため、相変わらず外国語の1クラスが40名を超えているなど、決して満足のいく外国語教育の環境でない事は変わりません。それにもかかわらず、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員として大変うれしく思います。

ドイツ語は、実用という点では英語や中国語などに比べてその利点が見えにくいと思います。しかしそれ以外にも印欧語の文法的特徴が多く残っているため、外国語の学習をそのものとして楽しむことが出来る言語ではないかと考えています。1人でも多くの学生さんにこの楽しみに気づいてもらえたらと願っています。

最後になりましたが、意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげで今回もこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。（島田 了）

フランス語部門

2007年度のフランス語部門のコンテストは12月7日（金曜日）に名古屋校舎の中央教室棟3階の第1研修室にて16時40分から実施された。昨年は国際コミュニケーション学部のラッセン先生が海外研修中だったので、残念ながらネイティブの先生を審査委員長としてお迎えすることができなかつ

たが、今年度は例年通り、ラッセン先生に審査委員長を務めていただいた。名古屋校舎の学生としては初めて、ネイティブの先生に発音等を審査していただくことになった。気のせいかな、出場する学生はもちろん、フロアに50人ほど集まってくれた学生たちも緊張しているようであった。今年度は14名の学生がコンテストに出場してくれた。

今年も例年通り、予選と本選に分けて行い、予選では課題の朗読を行ってもらった。今年の課題には、フランスの詩人であり、脚本家であり、映画監督でもあるジャック・プレヴェール（Jacques Prévert）（1900～1977）のバルバラ（Barbara）を選んだ。少々長い作品なのでおよそ半分くらいの分量を朗読してもらうことにした。

今年は一年生がとてもよく練習してきたので、予選では上級生の方が圧倒される形となった。エントリーした14人のうち、予選を勝ち抜いたのは、3年生が2名だったのに対して1年生は4名となった。

本選では同じバルバラの残りを朗読してもらうことにした。学生諸君もこれは予想していなかったようで、さすがにフランス語に慣れている上級生の方が実力を見せつけたが、2位に1年生が入賞したことは、驚異的なことと言えるだろう。入選者は以下のとおりである。

第1位 05M3607 橋本 彩香

第2位 07M3135 三輪 真也

第3位 05M3552 尾関 洋

橋本さんは正確な発音に加えて、フランス語独特のイントネーションや落ち着いた話しぶりが見事であった。2位の三輪君は一年生とは思えないほどしっかりした発音で、普段からよく勉強していることがうかがえた。3位の尾関君は上位の二人と比べても遜色のない立派な朗読だったが、ほんの少しミスをした点が惜しまれる。

今回のコンテストでは試験的に、フランス語上級クラス履修者によるフランス語の寸劇を実施してみた。『のだめカンタービレ』に出てくるフランス語の会話部分を履修者が暗記して、小さな劇を行ってみた。いくつか予想外のトラブルが発生

して、必ずしも練習の成果を十分に発揮できたとは言いが、さらに工夫を重ねて、フランス語の勉強は楽しいことを学生諸君と一緒に伝えていきたいと思う。(中尾 浩)

中国語部門 (法・経営)

第13回外国語コンテスト中国語部門 (法・経営) は、2007年11月20日 (火) 16時40分から行われました。

審査は矢田先生と鄭の2名が担当しました。今回は前回より参加者が多く、激戦だったため、とくに三位を決めるのには時間がかかりました。厳正な審査の結果、次の3名を入賞としました。

- | | | |
|-----|---------|------|
| 第1位 | 03M3371 | 宮本貴文 |
| 第2位 | 06J1410 | 渡邊 淳 |
| 第3位 | 07M3570 | 堀 晋悟 |

例年の通り、1年生を中心とした基礎部門と2年生を中心とした応用部門に分け、それぞれの課題文を朗読してもらい、発音の正確さと朗読の流暢さを評価の対象としました。基礎部門の朗読課題は「我的一天」(私の一日)で、応用部門は中国の笑い話「买鞋」(靴を買う)でした。今年の基礎部門の参加者は32名で、応用部門は12名でした。第1位の宮本君は、中国留学も経験している実力者で、発音の正確さと流暢さにおいてはダントツに優れていました。第2位の渡邊君は、そのきれいな声調がいまだに耳に残っています。もう少しリラックスして、流暢に朗読できていれば、1位の宮本君と激戦となったはずです。第3位の堀君は、32名基礎部門参加者の中で唯一入賞した学生です。中国語の勉強が始まって、まだ8ヶ月ですが、その安定感のある流れのよい朗読ぶりは今後おおいに期待されます。

今後ともより数多くの学生がこのような知的な刺激舞台に登場することを切に願っています。

(鄭 高咏)

中国語部門 (現中)

2007年12月6日 (木) 13:30から、課題部門9名、自由部門3名の合計12名が参加して行われました。審査は昨年同様、顧明耀先生、高明潔先生、安部の3名で行いましたが、今回は宣伝不足もあったのか参加者が少なく、昨年の半数以下となってしまうことはとても残念でした。ただ、内容的にはすばらしい発表が多く、今回も審査には苦労しました。

課題部門は、「秀才吃包子」という文章を暗読してもらいました。内容は、昔中国に一人の「秀才」がおり、彼の書く文章が長いだけで中身がないので、妻が一計を案じ、餡の少ない肉饅を作って食べさせ彼を諷めたというものです。出場者は、発音が正確であるばかりでなく、「秀才」夫婦のやり取りを面白おかしく表現して、思わず笑ってしまうほどでした。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

- | | | |
|----|---------|-------|
| 1位 | 07C8016 | 遠藤 茜 |
| 2位 | 07C8014 | 上野 美紗 |
| 3位 | 07C8060 | 出口 慎也 |

自由部門は3名の参加でしたが、レベル的には例年と比較しても遜色のないものでした。ただ参加人数が少ないため、第1位のみ之选出となりました。

- | | | |
|----|---------|-------|
| 1位 | 06C8084 | 盛田 美帆 |
|----|---------|-------|

盛田さんのスピーチは、「中国火車上の感受 (中国の列車で感じたものは)」というテーマで、中国短期留学中に列車で旅行し、そこで出会った人々との暖かな交流が、彼女に列車の旅の良さを再認識させ、また父親との間にあったわだかまりをほぐすきっかけにもなったというお話でした。内容的にも良かったのですが、中国語のすばらしさに審査員一同本当に感心しました。盛田さんは、第21回全日本学生中国語弁論大会にも出場し第2位となっています。(安部 悟)

韓国・朝鮮語部門

07韓国・朝鮮語コンテスト「本選」は、12月4日(火)16:40から実施された。参加者は2年生・3年生の30名。以上とは別に、過去第一位に輝いた田中優貴君の特別参加もあり、1年間におよぶ韓国姉妹校交換留学の成果を後輩たちに存分に示してくれた。この場を借りて、感謝の意を表明したい。

審査は韓国語担当教員の韓 銀暎先生、同、常石の二名が担当した。十分に練習を積んだ参加学生諸君の熱のこもった発表が続いた。実力伯仲のため、毎回のことながら審査に苦しんだ結果、入賞者は以下のごとく決定した。しかし、入賞を逃してもその実力差は「極小」という学生が多く、審査員を喜ばすと同時に苦しめた。

第一位	05M3178	チョウ 趙	ヒョンジュ 顕樹
第二位	04M3244	西村	一騎
第三位	06M3536	渡辺美智子	
(特別参加)	04J1375	田中	優貴

第一位 趙 顕樹君の発表原稿を後に掲載しているが、その内容は、趙君とサッカーとの出会い、および02日韓共催ワールドカップ大会の経験をまとめたものである。補足して言えば、「日本 T V.」の視聴率調査によると、日本テレビの2001年以降のあらゆる番組中、第一位視聴率を占める放送が同ワールドカップにおける「韓国：ドイツ戦」であったと言う。つまり、日本の試合ではない「韓国のサッカーの試合」が、日本テレビの今世紀の第一位視聴率に輝くという。趙君は、最後に「このようにサッカーは、皆を一つにすることができる美しいスポーツだと言えるでしょう」と結んでいる。スポーツが国家高揚目的やナショナリズム示威の目的に堕している昨今の世界情勢にあつて、「スポーツ」本来の姿とその素朴な本質について趙君は訴えている。(常石希望)

日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない学生を対象に開かれています。今年は「留学生の見た日本」というテーマで、自分の体験を盛り込み、身近な出来事を通して考えたことを、自分のことばで述べるのが課題でした。

法学部・経営学部・現代中国学部の1年次の留学生は毎年全員参加でこのコンテストに臨んでいます。50名近くになりますからクラス予選を行います。日本語の3クラスからそれぞれ3名の代表者が選ばれ、計9名が本選に進みました。本選へは他の学年の留学生も自由に出場できますが、今回は申し込みがなく、2007年12月6日(木)に1年生9名で競うことになりました。

今年もさまざまなトピックがありました。印象的だったのは勉強やアルバイトで苦労はしても、経験の中で日本人の責任感の強さや思いやりといったものを学んだという肯定的な意見が多かったことでした。異文化の中で学ぶ留学生たちの心情が少し距離をおいて語られているという点で、例年にも増して説得力がありました。イントネーション・間の取り方などのスピーチの基本だけでなく、アイコンタクトなど、聴衆とのコミュニケーションを大切にするという取り組みをしました。クラス予選でのスピーチも内容豊かなものとなり、その結果、レベルの高い本選となりました。

審査は、日本語科目担当教員2名(梅田・架谷)、学生審査員2名(留学生・日本人学生ともにスピーチ入賞経験者)、聴衆約50名の投票によって行われ、拍手と熱気の中、3名の入賞者(敬称略)が決定しました。

- 第1位 07C8205 王 宜浩(オウ イジェ)
「おばあちゃんの知恵」
- 第2位 07C8208 姚 懿(ヨウ イ)
「私から見た日本人」
- 第3位 07C8179 李 雪(リ ユキ)
「外人」

次回の外国語コンテスト日本語部門には、日本人学生のみなさんもぜひ聴衆の一人として聞きにきてください。自分の国について留学生が話すのを聞けば、きっと意外な発見があるでしょう。

(架谷真知子)



外国語コンテスト入賞作



● 英語部門

第 1 位 Living in the Global Community as Japanese

07C8131 Megumi NONOYAMA

Today we are living in the global society and some people are actively engaging the international community. My aunt, too. She's working as a lawyer in America.

When I was young, I sometimes played with cousins, speaking only English. Because my aunt married to American, my cousins can't speak Japanese. Thus I sometimes couldn't communicate with them. The language barrier was impeding our communication. Such an experience made me aspire to communicate smoothly with people in English.

In my high school, I had an opportunity to study in Australia. In Australia, I almost enjoyed my stay, but I also felt there was still a language barrier. All classes were conducted in English. I couldn't understand what teacher said. Moreover, I was shocked by the fact that I didn't know anything about Japan, though I am Japanese and grew up in Japan. For example, I had a chance to learn memories of World War in Australia. I met a retired soldier and talked with him. He had fought against Japan. He strictly said to me, "During the war, I hated Japan. Japanese troops killed my friends. You aren't wrong, but you have a responsibility for what Japan did." I couldn't reply to him because I was totally ignorant about the war. Finally, he said to me, "Your responsibility is knowing the past, and that will promise us a brilliant future. Good luck to your future." As he said, we have a negative legacy of the World War that many Japanese pretend not to see. But I think we must face this fact. What is needed is a proper understanding of this negative legacy and accepting it. I think these efforts will help us understand who

we are, that is, our national identity. And through such an identity, we can express ourselves to foreign people, I think.

Thus, during my stay in Australia, I found that not only an acquisition of foreign languages but also such a national identity is essential for living in the global community. Then, I have strongly desired to be a member of the global community as Japanese.

Now I am majoring in modern Chinese studies and also learning English at university. I believe these languages will enable me to communicate with many people.

However, as I learned in Australia, learning languages is not enough to be a world citizen. Then, I want to learn Japanese and world history as well as foreign languages. I want to introduce Japan to foreign people anytime and anywhere and I want foreign people to know a genuine Japan. And I hope such an approach will be a stepping stone to engage the global community. To be a world citizen, I want to study hard and broaden my knowledge about the world in the years to come. Thank you.

● 中国語部門

第1位 中国火车上的感受

06C8084 盛田美帆

我喜欢火车。小时候，常常跟爸爸盯着看飞驰而过的火车，我想将来能在火车上干活儿就好了。第一次坐火车的时候，看着车窗外的风景不断变化，别提心里多高兴了。

今年在天津留学期间，我利用黄金周去了趟黄山。这是我第一次坐中国的火车。我期待着车窗外不断变化的风景，趴在车窗上看啊，看啊，我失望了。因为中国幅员辽阔，走了一程又一程，看到的只是大片的田地、散落着的民房，偶尔有行人、有羊群，但并没有什么大的变化。

车窗外跟日本不同，车厢内跟日本更不一样。

坐在一块儿的，就像都是老朋友一样，大家有说有笑，没有一个人觉得陌生。可我对自己的汉语没有信心，一直没有做声。干坐着多没意思，干脆爬上中铺钻了被窝儿。就是那天晚上，我下来的时候，不小心摔到下铺睡的大姐身上了。我一个劲儿地道歉，看得出把她砸得够呛，可她连声说：“没事儿，没事儿。”第二天我又向她道了歉。她笑着说：“我早忘了！”她让我坐在她的旁边儿，和我聊了起来。我一边儿吃着她给我的点心，一边儿吃力地用汉语回答。不一会儿，周围的人都过来了，大家一起聊天儿，完全是一家人的气氛。这种气氛，这种人与人的交流带来的温暖，是在日本感受不到的。

我去中国以前，听说中国人只对自家人热情。其实，并不是这样。连我这个外国人都体会到了他们对我是那么热情，那么关怀，那么温暖。反之，我们日本怎样呢？坐火车的，或者看书、或者听音乐、或者睡觉，哪有谁主动跟人搭腔呢？我觉得在日本由于手机和电子邮件的普及，追求人和人直接交流的越来越少了。

我第一次坐中国的火车，就感受到了在日本感受不到的东西，感受到了难以忘怀的温暖。我真想把我的感受告诉谁。我想应该先告诉小时候跟我一起看火车的爸爸。

虽然小时候我们父女俩很好，可从上初中起我们关系恶化了，连话都没的可说。爸爸很顽固，我也坚决反抗。所以留学期间我只是给妈妈打了几回电话，没给爸爸打过电话。但是这时我想起了爸爸，爸爸也喜欢火车，他肯定能理解我现在的心情。

我给爸爸拨通了电话。起初说得还有点儿生硬，但是越谈越轻松，越谈越热乎。让我感到意外的是爸爸非常熟悉中国，我问他怎么这么熟悉，他说因为每周都看中国火车的节目。我们忘了这是国际电话，谈了好久好久。好像俩人之间从来没有过什么隔阂似的。我们中国火车之旅竟然把我们父女的关系彻底调整过来了。

现在我每周都和爸爸一起看那个节目，我们俩有一个共同的梦想：一起坐上中国的火车，去扩大和中国人的交流，并且把这种交流永远地持续下去。

●韓国・朝鮮語部門

第1位 축구의 매력 (サッカーの魅力)

05M3178 趙 顯樹

안녕하십니까? 저는 경영학부 경영학과 3 학년 조현수입니다. 잘 부탁드립니다.

오늘 저는 축구에 대해서 이야기 하고자 합니다. 축구는 제가 생각하기에 여러가지 운동 경기중에서 제일 재미있고 아름다운 경기라고 생각합니다. 그 이유는 축구는 처음만난 사람이라도 축구공을 함께 차는 것 만으로도 곧 그 사람이 어떤 사람인가를 알 수 있고, 사이도 좋아질 수 있는 신기한 함을 가지고 있기 때문입니다.

또한 축구는 하는것도 재미있지만 보는것도 재미있는 경기입니다. 유명한 선수의 높은 기술을 보는것도 좋고, 자기가 좋아하는 팀을 응원하는 것도 좋다고 생각합니다. 그러나 축구를 보는데 있어서 제일 재미나는 대회는 물론 월드컵입니다.

월드컵은 세계 각국의 대표가 4 년에 한번 각 지역에서 진행되는 예선을 돌파해서 한 곳에 모여서 시합을 하는 대회인데, 그때는 모두가 자기나라 팀이 우승을 하기를 바라며 열심히 응원합니다.

2002 년에 일본과 한국이 공동으로 월드컵 개최를 한 것을 여러분도 알고 있다고 생각합니다. 그때 일본대표를 응원하는 일본 국민들의 모습을 기억하고 계십니까? 지금까지 자기나라를 위해서 모두가 단결하는 것은 별로 없었다고 생각합니다. 한국에서도 모두가 열심히 응원해서, 결과 4 위라는 최고의 성적을 얻을 수 있었습니다.

이와같이 축구는 모두가 하나가 될 수 있는 아름다운 경기라고 생각합니다.

●日本語部門

第1位 おばあちゃんの知恵

07C8205 王宜潔

皆さんこんにちは！

皆さんは日本に来て、どのぐらいになりましたか。日本で生活している間に誰かがいいアドバイスをしてくれたり、人生に役に立つ格言が見つかったりしましたか。私は去年留学試験を受ける前に、諦めたいという気持ちが出てきて、先生に相談したとき、先生が「佐賀のがばいばあちゃん」という本を紹介してくれました。「がばい」とは佐賀弁で「すごい」という意味で、この本の作者が九州の佐賀で祖母と暮らした子どもの頃の8年間を書いた自伝小説です。

では、皆さん、まず私が言うとおりにイメージしてください。勉強が苦手な子どもがいます。ある日、その子がおばあちゃんに成績表を見せると、得意の体育が5という満点以外は1と2ばかりでした。その子が「ばあちゃん、僕、1と2ばかりでごめんね」と謝ったら、もし皆さんなら何と言うのでしょうか。驚いたことに、がばいばあちゃん是这样言い返しました。

ばあちゃん「大丈夫、大丈夫。足したら、5になる。」

島田さん「でも、成績表って足してもいいの？」

ばあちゃん「いいよ。人生は総合力だよ！頭がいい人も、頭が悪い人も、金持ちも貧乏も、50年経てば、50歳になるよ。」

皆さん、がばいばあちゃんの言葉は、シンプルで力強く、素敵だけでなく面白いユーモアにも溢れていると思いませんか。

さて、今、深刻な社会問題になっている自殺についてがばいばあちゃんは何と言っているのでしょうか。

「世の中には、病気で死にたくない人がいっぱいおるのに、自殺なんて、贅沢だ。」

皆さん、ばあちゃんの言葉は、時代が移り変わっても、やはり、心に響くものだと思いますか。

ところで、人生には、苦しいときも、悲しいときもあります。そんなとき、物質的なものではな

く、皆さんの心の奥では、こころの支えになってくれる、もっと違ったものを求めているのではないのでしょうか。そんなものが、この本の中にあるかもしれません。

私は勉強や、バイトや、生活などで悩むことがよくありますが、そんな時がばいばあちゃんの言葉を思い出すと、前向きという信念が強くなってきて、頑張れば、できそうにないこともできるようになると思います。

最後に、がばいばあちゃん是这样いしました。「時計が左に回ったら、壊れたと思って捨てられる。人間も昔を振り返らず、前へ前へと進め！」みなさん、私たちはこれからの人生には、何があっても逃げずに、強い心、負けない心、勇気を持って自分らしく堂々と輝いていきましょ。みなさん、是非一度この本を読んでください。

編集後記

『語研ニュース』第19号をお届けします。今回は史上最高の頁数を誇る大部の『語研ニュース』となりました。この場を借りて執筆者各位に感謝の意を表します。今回はカラー写真も多かったので、予算内で出来上がるかどうか心配だったのですが、お陰様で無事完成しました。中部日本教育文化会の向井さんに大変お世話になりました。

今回も奇数号の恒例通り、前年末に行われた外国語コンテストの講評と、上位入賞者のスピーチ原稿を掲載しています。御覧の通り、どれも優れた内容のものであり、またそれぞれの外国語も注目すべき水準だと言えます。しかも、現代中国学部学生の中国語以外は、外国語や外国文化を専攻していない学生諸君が、これほどの水準のスピーチを外国語で聞かせてくれるということは実は大変なことです。このスピーチコンテストのこと、特にここに参加している学生たちのことは、学内や学外に大いに宣伝して誇りにすべきことだと私は思います。入試広報などにも最大限に利用してもらえればと考えています。今年ももちろん、11月から12月にかけて、各語系で昨年と同様なコンテストが開催されます。出来るだけ多くの学生の参加を期待しています。

これまでも何度かここに書いてきたことを、敢えてもう一度繰り返して書きます。夏休みのほぼ一ヶ月半の間、外国語から遠ざかって生活をしていると、これまでせっかく身につけた語学力が衰えてとても勿体ないことになってしまいます。春学期中の授業のテキストを暇なときに読み返したり、その外国語の新聞を読んだり、あるいは自分の趣味や興味のある分野に関する本を読んだり、ニュースや天気予報などをその外国語で聴いたりなどのインプットを、少しずつでもなるべく毎日続けましょ。